

ボールゲームへ
連れてって

4



Miracles!

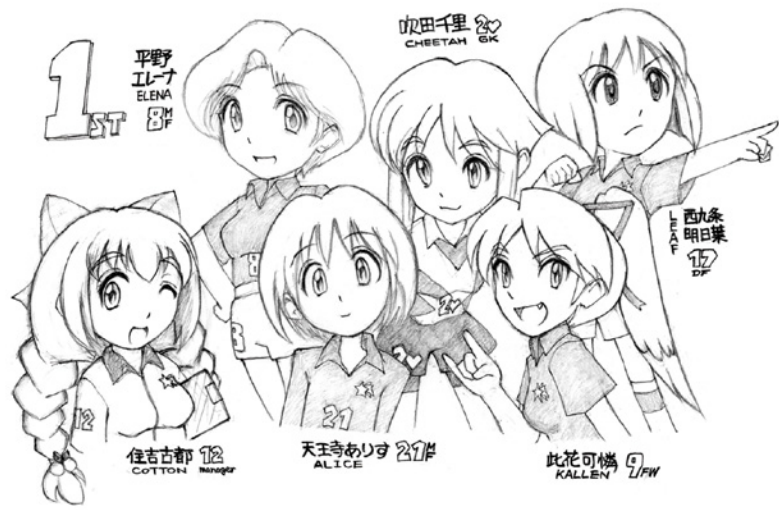
ミラクルス

ながたかずひさ

Miracles!

Episode 4

- ボールゲームへ連れてって -



■あらすじでござる

女子サッカークラブ「ミラクルズ」は、とある街の人気者。高校1年から3年までの一六人+マネージャーが、超色男（ただし自覚なし）コーチに率いられ、楽しく激しく恋に笑いに涙に人生にそしてサッカーに勤しんでおります。

ただいまの目標は、毎年お正月に行われる日本最大のオープン大会「クイーンズカップ」への出場、そして夢はでつかく、優勝です！

はてさて今回は、どんな騒動が巻き起こりますことやら。

■目次

- 1 おばちゃん vs 小娘
- 2 ドルチェでドン
- 3 ももの誘惑
- 4 スポーツ乙女罫に掛かる
- 5 外堀を埋める空堀
- 6 説得させようと説得する
- 7 真夜中デントル・クリニック
- 8 背番号、愛犬の思い出、そして軟禁玉すだ
- れ
- 9 弱者の戦略
- 10 バトルフィールド・オブ・ドリームス
- 11 夢はでつかくハてしなく

【本日の主演】

・梅田もも（うめだ・もも）DF4 3年

B三桁のだいまないとばでーを揺すぶりながらバイキングを荒らし回るスイーツ魔神。

ピッチでは鈍足ながら慎重さと落ち着きで全幅の信頼を得るフェアプレー・DFリリーダー。

・澤村栄（さわむら・さかえ）3年

所属チーム無しの孤独な野球少女。「飼い犬に似てる」という無茶な理由でももの目茶に巻き込まれる。剛速球と野性的な外見がチャーム・ポイント。

【ミラクルズ・メンバー】

〔3年生〕

・森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ／くー）FW

14 クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。高々度戦闘爆撃センターFW。

・守口忍（もりぐち・しのぶ）GKI

時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。不屈の守護神。

・八尾由美子（やお・ゆみこ／ユミ姉）MF16

頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝っ玉は天下一品。守備職人、MF・DF。

・マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きしわだ／PK）MF19

ブラジル人日系4世留学生。誰にも止められないだんじりサンバ娘。トリッキークーイング。

〔2年生〕

・長居美緒（ながい・みお／みー）MF10(C)

一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。パーフェクトボランチ、キャプテン。

・難波鳴海（なんば・なるみ／ナナ）MF7

ユース代表を張るサッカー小娘。二四時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。

・和泉流乃（いずみ・るの／るー）DF5
センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。光速サイドアタッカー、副将。

・天満蘭（てんま・らん）DF3

天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラ
ルガール。超攻撃的パワフルリペロ。

・美原はなこ（みはら・はなこ／はな）DF2

神経質でもうるさくても、学年トップのど根性
秀才、作戦参謀兼任。クレバーなスピードDF。

・堺愛（さかい・あい／プリンセス）FW11

無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、
お茶目。フィジカル自慢のパワーFW。

「1年生」

・此花可憐（このはな・かれん／カレ）FW9

ド単純でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。
ユース代表の逸材。エース・ストライカー。

・吹田千里（すいた・ちさと／チータ）GK20

ボーイッシュナンバー1元気も一番、いつもチ
ームのムードメーカー。FW兼任の超反応GK。

・平野エレナ（ひらの・えれーな／エレ）MF
8

日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔
らか、微笑み一杯。大型MF、中盤の働き蜂。

・天王寺ありす（てんのうじ・ありす／あー）M
F11

砂糖菓子少女っぽいが底の知れないキャパを
持つ天才少女。攻撃的MF、ファンタジスタ。

・西九条明日葉（にしくじょう・あすは／はっぱ）
DF17

天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。
鉄壁のDF、右サイドバック。

・住吉古都（すみよし・ここと／こことん）Manager
ど派手な見た目に似合わず思慮深い、縁の下の
力持ち。心配りのマネージャー。

「男性陣」

・上町大地（うえまち・だいち）2年

超オットコマエ・ミラクルズ・コーチ。
サッカー戦術と乙女心掌握の天才。

・空堀三十六（からぼり・さとる）2年

冴える頭脳に軽い足腰、チームの盛り上げ役。

ミラクルズ・チームプロデューサー、ナナと夫婦漫才。

・駒川匠（こまがわ・たくみ）2年

プロ顔負けの腕前を持つ写真部のエース。

なんでも撮っちゃう。はなことそこそこいい関係。

・千林哲哉（せんばやし・てつや）2年

応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。

豪放磊落、情に厚い。声がでかい。

■ 1 おばちゃん vs 小娘

「……どっち勝つて欲しい、みーちゃん」

「どっちもかな」

「ええい八方美人め、心にも無いことを」

「心にアリアリですよ。私にはキャプテンという立場が」

「そんなもんぐらい今は忘れ。スポーツ観戦つちゅーもんは最良チームに入れ込んでなんぼやで！」

「じゃナナはどっち？」

「ウチ3年にしとこかなあ。忍様と対戦してみたいし！」

「じゃあたしは1年にしよ」

「ん。俺も流乃と同じく1年で」

「なんやのんあんた！ たまにはウチと同じチーム応援してえなあ！」

「あはは」

ここは校内グラウンド、ミラクルズ2年生いつもの面々が、グラウンドを見つめ

ながらワイワイ騒いでいる。

視線の先には、校内女子ソフトボール大会準決勝。3年選抜 vs 1年選抜の白熱した戦い。

運動神経ばかりは量り売りするほど持てあましている「ミラクルズ」メンバー、1年生六人も3年生五人も共にバッチリスタメンに名を連ね、女の戦い真つ最中。高みの見物の2年生、どちらを応援するか、というお尋ねが、難波鳴海、通称ナナ。応える長居美緒キャプテン、いつもどおり天の邪鬼な和泉流乃、嫁の神経を逆なでする空堀三十六、いつもニコニコ上町大地。美原はなこが聞く。

「あれ、ナナとこつて最頂チームとか違うの？」

「そう！ とにかくズレンねん。Jやとウチガンバこの人セレッツョ」

「セレッツョ言うな。桜と伝統のセレッツョ大阪です。野球やと俺は特定球団無くて、この人パンチン」

「パンチン言うな。阪・神・タイガー・ス！ なにに、なに恥ずかしがつてんのん、あんたには愛する愛する近鉄バファローズがあるやないの」

「言うな、もう言うな」

「この人もう亡くなった球団まだ応援してんねんで？ 意外に純やろ？」

「うるさいなー。お前に俺ら往年の猛牛ファンが野球を観る時の穏やかながらもちよつぱり切ない気持ちがある……切ない気持ちがあつてたまるかー！」

「せやけどたまには同じチーム応援したいや〜ん」

「いやそもそも応援スタイルが違う。お前うるさいねん。ピンチでもチャンスでも俺の首締めるし」

「野球の応援は盛り上がっていかな！」

「真剣勝負の駆け引きを一球一球楽しまなあかんやろう!？」

「野球観戦は野球なんかどうでもええねん！」

「ライトスタンドで踊る、歌う、叫び狂う！ これ！」

「あとハタチ超えたらビール」

「いやそれは」

「カドタア！ 豚まんやあ！ こつち来て一緒に喰おお！」

「なんで藤井寺の内野席やねん」

「バァー……ス かつとばあせ バ・ア・ス」

「でた永遠の英雄」

「ライトオオオオオオオオへ レフトへ ホオオオオオムラン！」

「誰か止めてー」

「三十六君以外に誰が止めるの」

堺愛が笑う。どこのチームであれ狂信的なファンは、自分の応援で自分も応援するので、自分で発火して燃え上がる。

「くあつとばせー！ー！ー！ーバ・ア・ス!!」

「阪神ファンはいつになったらランデーのことを忘れるんやろう……」

「今世紀中は無理なんじゃないの？」

「あはははは。」

あつ、観て観て、大詰め大詰め！」

天満蘭が彼女らしいおおらかさで注意をグラウンドへ向けた。

——回は七回裏最終回、点差は3年生の3点のリード、マウンドには守護神・守口忍。古武術で鍛えた長身瘦躯を華麗に操り、コーナー一杯を丁寧に突くストリートと、グツと沈む変化球で1年打線を手玉に取る。アウトカウントはすでに2ダウン。

が、ここで迎えるは1年生上位打線、一番・此花可憐が左打席。鋭い吊り目が女

狐のように爛々と獲物を狙う。

「カレーーーーーン!! 短く短く!!」

「球筋キレイやから思い切り振れーーーーー!!」

「真逆のアドバイスしてどうすんのん」

「いや最終的に決めるのは可憐やから」

「可憐ちゃんにあんまり難しいこと言っちゃダメだよ」

しかしこの日のキツネは冴えが違った、流乃と三十六のアドバイスを聞いたか聞かずか、一握り半も短く持ったバットを、

ピュンツ!!

……キーン!

振り抜く。

短い金属音が鳴って、速いグラウンダーがサード・マキとショート・ユミ姉の真ん中を……

……ズザアッ!!

割らせない、さすが根性娘八尾由美子、ダイビングでその球をクラブに引っかけると、跳ね立ち上がって全身を弓なりにして送球……

セーフ!

エースストライカー・可憐の脚は二〇mダッシュならオリンピックピックだつて狙えると専らの噂。左打席走りながら振り抜いたからにはショート深いところからでは到底間に合わない。内野安打。

「うし!」

小さく拳握る、一塁ベース上の可憐。打席に向かう二番・吹田千里が目を合わせ、右打席に入る。

右に?

マウンドで忍が顔をしかめる。千里は器用で小技が効く。しかし2アウト、なにかやってくると言ってもそう手は無いはずだ。気を取り直して、

「あ、あかんで忍様！」

ナナが叫ぶヒマもない。ボール・リリースの瞬間、初球から可憐が猛然と走った。千里がゆ〜つくりと援護スイングをする。捕手、梅田もも、が、中腰の送球姿勢に入る頃にはもう、悠々二塁塁上で立ち上がって、手を腰に。完全に隙を突かれた。さあ得点圏。

可憐がVサインを挙げてその指を左右に振った。千里はそれに親指と人差し指を伸ばした手を振って応える。あれは、なんの合図だ？

たまらず駆け寄るキャッチャー、もも。

「……しの、いいからいいから。バッターオンリーバッターオンリー。可憐ちゃん還ってもいいから」

「へ」

「直球で押す？ 落としていく？」

「……んー」

即断即決の忍が珍しく迷う。千里はバットコントロールがべらぼうに巧い。直球だとセーフティバントで狙い打ちされないか。脳裏に先ほどの内野守備がよぎる。千里もまた脚が減法速い。

「……落としていこつか」

「うん！ 三振奪ろうね！」

「ツケー」

『……あー、私G K向きだなー』

妙なことを思う。そして自分がなぜ、積極的に父の武芸を継ぐ気にならなかったのかも。相手にゴリゴリ自分の意図を押しつけるのが苦手なのだ。だから、投手は向いてない。

が、今はとにかく。

生き生きと輝く千里の双眸めがけて、

……ふわり……ふっ

「はっ！おお！！」

キインツ！

中途半端な心境で投げた中途半端な変化球に対し、千里はもうモロに好みのシチュエーション、好みの役割、好みの技。ピンチで、つなぐ、小技で。

それで勝負になる、わけがない。

まるで水炊きのお豆腐のように優しく掬い上げられたボールが、ふわりとセカンドベースを越えてセンター前へ。

可憐が三塁を蹴って……

「ストロー——ッブ！！ストップストップストオオオオオオッブ！！」

「いけーーーーー!! 回れーーーーーッ!!」

……今度は可憐は、三十六の言うことを聞いた。というよりも、彼女の頭の中に当然あった。センター・フィールダーが、森之宮胡桃であることが。

びゅーーーーーん……

可憐のシュートのお株を奪うような、レイザー・ビームが本塁もものミットヘジヤスト・イン。回つてれば間違いなく、ゲーム・セット。

「……わ、スнгеー肩」

「三塁コーチャーはそれも検討しないと、流乃ネエ」

「そか。難しいんだね、割と。ヤキュー」

「ていうか肩抜きでもあのタイミングで回れ言うの世界中であんただけや」

「るーだったら、取れてた? 本塁」

「……タイミングはいけるだろうけど、あたしスライディングとか練習したことないからな」

「あんた何言うてんのん、普段スラでボール奪ってるでしょーが」

「……ん？」

「この人ホラ、滑らないDFだから」

「そやったー!!」

「いいでしょ、売れっ子みたいで」

「あかんわ」

「汚れるの嫌いなもの」

「もうサツカー止めい」

「ほらほら、あーちゃんあーちゃん」

「おっ、そやそや」

「これは見物だね！」

三番は天王寺あります。誰が見てもそして事実非力で華奢な彼女を、最強長打者の座る三番に持つてくるあたり、1年生もよくわかつてる。

この女がヤバイ、いやとてもヤバイということ。

いつもどおり老若男女誰をも安心させる「とととと歩き」で左バッターボックスに向かうと、審判に礼、捕手に会釈、投手にメットの縁を触れて挨拶して、バント

の構え。

さあ悩む。

無論2アウトであるから、スクイズでも送りバントでもない。セーフティバントだ。ありすも脚は速いので、巧く転がされれば六分七分成功するだろう。問題は2ダウンすることで、リリースの瞬間三塁可憐も一塁千里も全速ダッシュ、次の塁に確実に到達するだろうから、守りにくい。

内野陣集まる。

「……敬遠？」

「次誰？」

「「……うわあ」」

「しの、人食いイルカがニコニコ泳いでる水槽と、ナマコとウミウシとイソギンチヤクが一杯に詰まった水槽、どっちがいい？」

「……人食いイルカ」

「じゃそれで。内野前進守備、送球は一塁決め打ち」

「了解」

散る内野陣、またいつもどおりぶかぶかのヘルメットの下に、緊張の面持ちのありすは、完全にバントの構え。中腰、身体正面をピッチャーに向けてバッターボックス最前列最内側、プレートに覆い被さるように。

相手がそう来るなら……

そのバット、へし折るまで!!

サーッ……

背後で音がした。

忍、歯を食いしばりながら猛然と回すウインドミル。白球が唸る。ありすが身体ごとバットを引く。高めボール球を左手ミットでもぎ取るもの目に、二塁に殺到する千里、跳ね立って三塁振り向く、今まさに突っ込まんと前傾姿勢の可憐と、目が合う。反射的に二塁に投げていけば、盗られていた。

「ボーッ！」

そして無情なハズレのコール。力みすぎ、球が浮いた。

ふう、と肩の力を抜いて、一旦ボックスを外すあります、この1球はあります、というか1年ベンチの勝ち。

「……OK OK 同じ同じ……！」

もも立つて両手振って叫ぶ。忍も肯いた。相手の目的はこちらの攪乱で、それは挫いた。得点圏二人はまあ、しょうがない。そもそも敬遠だって選択肢にあつたわけだし。

先ほどと同様、内野前進守備バツター勝負。

「へいあーちゃんクロいクロい！ 腹黒い！」

内野席からナナが茶化す。ありすがのめり込んだ時のビッグバン力はチームメイトミなが骨身に染みいるほど知ってる事実で、なにをしでかすか誰にも、おそらく本人にも予測不可能。

聞こえてか聞こえずか、あります、今度はボックスやや後ろ目真ん中に立つて、同

じくバントの構え。今度はガチガチではなく適度に肩の力も抜けている。

ダッシュ勝負——内野陣がつま先立つ。捕手もも前のめりになる。三塁二塁の可憐と千里も、今にもその脚を爆発させんと力を溜める。

きゆうううううう……
すつ。

圧縮する空気に嫌気が差したか、忍がプレートを外した。

途端に緩和する空気。

大地、ふと、僕も応援してみるか、と余計なことを考える。

「……ありーす。」

のんびりとした声を一声掛けて、バントの構えの手を、二、三度揺すつた。ありす、こちらに視線、パーツと花のように笑う。

ありーちゃんは、コーチが、だいすき。

「……大ちゃん、なにそれ」

「サイン」

「だからなの」

「うまく行きますように、って」

「それサインじゃねー!!」

『……またエコひいきして……』

と、軽くムスツとしながら忍、口元を袖口で拭って、セット。

セーフティバントならむしろ緩いボールで、前に飛ばさないのも手だ。ももは体格に似合わずフィールディング抜群、ボテボテなら必ずアウトにできる。

よし。

ゆったりとしたモーションから……

ふわっ

……さつ。

「「えっ!?!」」

カ・キーーーーーーン!!!

「「バスターーツ!!」」

嗚呼見事、花の一塁線ブチ破り。

両手叩きながらホームインする可憐、華麗なスライディングで帰還を決める千里、二人ハイタッチして、二塁塁上のありすに、サムアツプ。ありすはその純真無垢過ぎる天使の微笑みで、両手を挙げて応える。これで1点差なおも走者得点圏。

「ク、クロおおおお! 黒すぎるぜあの女!!」

「この空間全体がバントの空気がつたのに……」

「だ、大地まで利用したの凄かった」

「いやあれ利用とかそんななんなんも考えてへんねんで。せやからできんねんで」

「怖いわーホンマありすきん怖いわー」

「いつもああだよ、空気と違うことを突然するんだよね」

2年は感心しきり。当事者の3年はいつまでも終わつたことに拘つてる場合ではない。

「……私もーやだ」

「しの、あの子は変態だから。忘れるの。もう一塁ベースのことは忘れていいから。還つてきても同点だから。次。次こそバッター勝負で」

「ウミウシか……やだなあ」

「私、やつぱり澤村さんをお願いしてくる！」

「あつ」

ももが止める暇もない。一塁を守っていたソフトボール部の手島さんが、3年ベ
ンチ——といつても3年生が並んで観戦してるだけだが——に駆けた。一人の女の
子に声を掛け、手を引く。立ち上がると大柄で、体操服の着こなしがいい。ああ、
いかにも運動能力の高そうだな。

「……おつ、なんやなんや？ 秘密兵器か？」

「あつ。澤村先輩」

「匠？ 知ってるの？」

「えとね」

彼女は困惑した表情で、両手を胸の前で振って、頭を下げた。手島さんは少し粘ったが、諦めた。マウンドに戻る。

「……やつばダメだった」

「てっちゃん、無理じいは良くないよ」

「うーん、ピンチ観てたら血も沸くかな、って。ガンコモノめ」

「ふふ。」

「……しの、ここはキバって行こう！ だって相手きつと、昨日今日バット初めて持ったような人だよ！」

「それが怖いんだってば。」

「……つつつても始まんないね。わかった。頑張る」

「うん！」

みんな！ 集中——————ッ!!」

「オウ!!」

ついいつもの、サッカーでの癖が出た。言いたいことはわかるので、全員、気を引き締めて、散る。

「……いつも体育館の裏で一人でキャッチボールしてる人」

「へ？」

「ていうか一人でキャッチボールって言わんやろ」

「違うんだ、なんか壁に出っ張つてるところがあつて、そこへ剛速球当てて、ポーンと跳ね返つてくるのを、こう、捕る」

「なんだ、あの人はヒューマさんかなんかか」

「体つきはピューマみたいなエエ身体やけどなあ」

駒川匠、今もナウ熱戦をカメラに収めている校内一のカメラマン、は、暇さえあれば校内中を歩き回ってシャッターチャンスを狙っている。学内で彼が知らない人

間は居ない。し、彼を知らない人間も居ない。

「……凄いボールだよ、ビューン！つて音してる」

「忍様のボールとだつたら？」

「いや、そのボール硬球なんだ。だから直接比較はできないけど……」

「格が何段も違う」

「へーっ」

美緒の問いに応える匠。彼は仕事柄、物を見る目には信頼が置ける。彼がそう言うなら、相当凄いのだろう。

「……ケガでもしてるのかな」

「どうなんだろうね。そんな風には見えないけど」

「あれ？ つてことはソフト部やないんか。手島先輩つてソフト部やろ？」

「ん？ ソフト部じゃないのにずーっとピッチングしてるの？ なにそれ？」

「さあ？」

「……あ、来たよ、はつぱちゃん！」

「おつ、我らが異次元主砲の登場ですか」

四番、「我らが」西九条明日葉。

右バッターボックスに入ると、いきなり、

ビシッ!!

ワーッ!!

予告ホームラン予告に、スタンドが沸いた。

無論本塁打が出れば、逆転サヨナラである。ヒット一本でも、同点。

「……あーいかん、誰か余計な知恵つけてるらしい」

「あつ、あいつだ。ベンチでふんぞり返ってるおさげオバケ」

「あーっ！ ヤツかあ」

「ふふ。なんとなく大地君の真似してる」

「ホントだ。腕組んで歩いたりして」

「可愛いもう」

その住吉古都は、普段チーム・マネージャーとしてコーチ・上町大地のすぐ側に居る。彼を一番間近で見続けているわけだから、自然、振る舞いも似る。顔をしかめて、腕組みでウロウロしている。隣でほわほわ笑ってる平野エレナとの対比が面白い。

その急造監督にあることないこと吹き込まれたらしい四番・主砲が、吼える。

「UFO打法—————ツ!!」

キターツ、という顔、顔、顔。この学園のみんな、明日葉の「変」っぷりには慣れてるつもりだが、いつ聞いても心臓に悪い。

天高く突き上げる両腕。グリップ付近を持ち高く掲げ挙げたバット。

それをぐりんぐりんぐりんぐりんぐりんぐりん回しつつ、腰をくねんくねんくねんくねん……

あああれは伝説の。

「♪テーレーレーレー　テーレーレーレー　テレレレ　テレレレ」

「古……」

「いや今動画サイトとかあるから」

「それを観るインセンティブはどこにあんねん」

「ほら私達ユニピンク色だし」

「あなた達はレディじゃないです。むしろレディース」

「明日葉ちゃんの家古いらしいよ」

「家関係ないやろ」

「あれはきつと『源氏物語』に書かれている幻の……」

「プリンセス嘘はいいんです」

「カッコイー！」

「蘭姉ちゃんも変なところ憧れるよね」

「だってほら、達人みたいだよ！」

「なんの達人かはわからんけども」

辛いのはそんな「変」に付き合わされるバッテリーの方で。忍、改めてピッチャーを引き受けたことを後悔した。といつてもソフト部全員で推挙されれば断るもの

も断れなかったのだが。

『……しの、ここはど真ん中でいいから、全力で行こう！』
『ん』

ももはいつだって優しい。

いつもそうだな、押し込まれてキーパーの私が、いやチーム全体がテンパってる時でも、彼女だけは私のことを気遣ってくれる。

息を整え直した。

そ、こんなの、いつものヒリヒリに比べれば、ただのお遊び。

シュッ——

投げる。

「カツ・き——————ん!!」

最初の「カツ」でタイミングを計り、「きーん」で勢いをつけた。

ジュワー……

と、ものすごい弾道のラインドライブが、わず・かに・左に切れていった。
超特大ファウル。

「ぞぞぞぞぞ……」

「すっげー……やっぱはつぽもヘンタイ」

「あのスレンダー・ボディのどこにあんなパワーが……」

「ま理屈捏ねるなら、あのぐりんぐりんとくねんくねんで身体全体の勢いを打球に乗せたんやろなあ……」

「……それと、上から叩きつけたが故のラインドライブだと思う」

「でも忍様の球もエエ球やったで!？」

「良すぎたんだ。反発の勢いもつく」

いつの間にか、大地は指揮官の目に少しだけなっていた。

刹那。

ボールとバットが触れあうその一瞬で全てが決まる、その緊張感が、彼の「指揮本能」を呼び覚ましたのか。

さあ難しい。力押しでは、持つて行かれる。

『……落としていいこ？ 低めギリギリからボールになる球』

『あのスイングだと掬い上げられそう』

『じゃあ……高めのストレートをボールに外して、次はそれを落としてストライク取る』

『……了解』

ボールでいい、と決めると、途端に肩が楽になる。

わずか数センチの差なのに、人間おかしなものだ。暈の縁を歩くことは誰でも出来るが、それが高度二〇〇mにあれば誰にも出来ない。

……それが、良くない。

「東京タワー打法……」

おおーっ!!

また、沸いた。

あれほどいい当たりをしたUFO打法を、捨てるという。失敗は許されない、悪の秘密結社のシステムらしい。

今度はバン！と開いた両脚に、先ほど以上に頭上高く真上に突き上げるバット今度は微動だにしない。その形まさに、東京タワー。

「……また珍妙なことを……」

「いや、あれはダウンスイングの徹底ちゃうか」

「……明日葉なりに見切ったのかもしれない。タイミングを」

「じゃそのタイミングで今度は最短でヘッドを出す、つてこと？ まさか」

「意外に策士やな、こつとん」

「アイツがそんなに野球に詳しいなんて知らなかった」

『そう！ その調子！ 東京タワーになりきるの！ はっばちゃん！』

『カントク！ どうしてTowerになりきるんデスか？』

『だって日本で一番高い建物だもの！ つまり『一番』つてことだよ!? 色も紅白

でおめでたいし!』

『ナルホド!』

『なんでもいいからカツ飛ばせハッピー!』

『ゲラゲラゲラゲラゲラ』

忍、ため息にも似た長い息を一つ、ついて、
ウインド……ミル!!

「ギーーーーー」

「アッ!!」

満座が目を覆った。

文字通り叩きつけるように振り下ろされたバットは、明日葉の手からすっぽ抜け、マウンド目がけて、飛んだ。

くる・くる・くる・くる・くる……

もちろん意図したのではなく、あんな重い物そう遠くに飛ぶはずもなかったが、それでも物理の悪戯か明日葉の悪運か、そのバットは縦の回転を与えられくるくる回った挙げ句、

ズドン！

とマウンド、投手足元に、突き刺さるように落ち、

カラン……

と倒れた。

満座が、顔を蒼くする。

明日葉に悪気があるわけは一〇〇%無い、ふざけているのでも決してない、しかし、事実として非常に危険な……というか人を完全に小馬鹿にしたような……事が起きた。

ボツ。

ある人は、ボイラーに火が点つた音を、聞いたと言う。

「わー、すすすすすすみませ〜〜〜ん！」

たぶんその場に居た人間の中で一番平常心だったのが彼女で、ぺこりぺこりお辞儀をしながら、テコテコとマウンドに向かった。

息を潜める観衆。

忍は能面のような表情で、足元のバットを拾い、真ん中当たりを持ち、グリップを明日葉の方へ向けた。

「ごめんなさい、忍様」
「ん」

ほんの小さく顎を引くと、背を向けて自分の殻に、閉じこもる。
キリキリキリキリ……と「自分」が消えていく。

いや、本来の「自分」に、被っていた「仮面」が吸い込まれていく。
自然に、戻る。

対する明日葉は、自然のまま。

「……スカイツリー打法………ツッ!!」

観客、今度は生唾を呑み込んで、見つめるだけ。
もも、囁き戦術を、試してみる。

「……あーあ。しの、怒らせちゃった、はっぱちゃん」
「勝負は勝負ですー!」

あら。意外に強い。

まあいい。さっきのスイング取ってもらって、あと、ストライク1つ。

「情け無用ですー!」

「ふふ。」

……じゃあ次は、忍ちゃんの魔球……

ニンジャ・ボール!!」

「につ、忍者ボール!？」

こつちか。

あからさまな動揺に捕手の悦びを感じつつ、サインは指一本、もちろんど真ん中ストレート生一本。ま、サイン無しでもこれしか投げないだろうけど。

忍が、顎を小さく引いた。

「……こ、こんな時に無粋なこと聞きますけど……」

さっきの打法と、どこが違いますのん?」

「名前じゃない?」

「……いや。」

つま先立ちしてる」

「ああ! それでさらに高いスカイツリーなのね!？」

ホンマかいなー!？」

「あれこそUFO打法のダイナミズムと東京タワー打法の正確性を兼ね備えた、今

現在西九条明日葉が使い得る最強の打法!!」

「ホンマかいなー!!」

大地もどこまで真面目なのかわからない。

しかしつま先立ちを観察し抜いたのは大地ならでは。

観客の心象風景に、空っ風が吹いた。

荒野で対峙する二人の侍。

片や雄藩の指南役師範代、エリート中のサラブレッド中のジーニアス、片や各地で流浪を重ね叩き上げで剣の道を究めた無手勝流・無敗の野武士。

これ難しいのは生まれ育ちは明日葉が前者で忍が後者なんだけど雰囲気は逆、つてことで……

当人達は、もちろん無心。

ももが投球をいや勝負を促すように、身体をすこし、揺すった。

スッ……

今までとはまるで違う身体のキレ、本気になった武人・守口忍の右のかいなが、円月に空を切る。遙かに長く遠く速く速く左脚を踏み込むと、その勢いをそのままに、白球に乗せる。

浮き上がる。

地の底から天を目指し羽ばたく鳩のように、ライジング。

明日葉はそれを見極める。

それは鷹の目。鳩は獲物。今日のごはん。

捕らえて、食べねば、わたしが、死ぬ。

パーパーンツ!!

叩き割った。

その、音が聞こえた。

客は、全員は、球と我とを見失う。

どこだ。どこへ。

ただひとりだけが、それを追っていた。

投手も打者も見失った白球を、ただひたすら。

ただひたすら追っていたから、自分がどこへ向かってどうなっているのか、わからない。それでも追う。

それはまるで、いつもやってたことだった。

いつもなら、人も見なきゃいけないから、もつと大変。

「「ギャーーーーーッ!!」」

呆然と勝負の行方を見つめていた2年の面々の眼前に、巨体が迫った。

体重はいつも教えてくれない。ただ胸囲は三桁はあるらしい。

とにかく迫力抜群のその喰い溜めた脂肪と糖と炭水化物の塊が、ブツ飛んで、きた。

支えようとすするもの、逃げようとすするもの、逃げつつあるもの、すでに逃げたものの、平静を装うもの、華麗に身をかわすもの、支えるふりをしつついつでも逃げられるようにしてるもの、シャッターを切るもの、ただ見つめているだけのもの。

様々な思惑と反射行動の中へ、梅田ももが、突っ込んだ。

「うああああああああああああ!!」

そして、キャッチャーフライに、飛びついた。
ああまるで、

もも、怒らないでね、

ハエに飛びつくウシガエル。

濛々と上がる土煙。

カエルは畔道でトラクターに轢かれてひしやげている。

そのまま、ゆつくり、ミットを、挙げて、振った。

白い獲物が、その中に。

「……ゲームセツツ! 5-4 ウオン・バイ・サードグレード!」

ワーワーワッ!!

その場に居合わせた全ての生徒が力一杯両手を叩く。

名勝負に、素晴らしい投球に、それを打ち砕いた打棒に、そして、決着をつけた捕手のガッツに。

興奮醒めやらぬグラウンド、はしやぎながらも元へ走る3年選抜、爽やかな笑顔で負けを悔しがる1年選抜、彼女を助け起こしながら笑うミラクルズの面々。それに背を向けて、去る女の子が、独り。

「……もちん凄いやーん！ よっ！ 稀にいるよく動くデ……デ……」

「デラックス・ガール!!」

「そうそれ!!」

「もも！ ナイスガッツ！ サンキュー!!」

「シヨリ記念！ 今日『エスポ』行くゾ！ 喰いまくれー!」

「おー!!」

『……サワちゃん……』

人波に揉まれながら、ももはその背中を目で追っていた。

■ 2 ドルチェでドン

「あーやつぱりピッチャーは無理！」

「そー言わないでよう、しのが一番だつてー！」

「だつて！ あれ最後見たでしよももが一番近くで！ あの私のホンキマジ全力投球を……」

「結果は勝ちじゃないですかー」

「当てられただけでも負け！！ 修行が足りん修行がッ！！」

ブルーベリータルトをほおばりながらプイ、と横を向く忍、なだめるもも、可憐。ここは洋菓子の『エスポワール』。戦い済んで、ノーサイド。糖分補給にいそしむ女子十一樂坊いや食いしん坊、ミラクルズ3年忍・もも・ユミ姉・マキ・胡桃、1年可憐・千里・ありす・明日葉・エレーナ・古都。

「そんなこと無いですー！ 魔球でした、魔球ー！」

「ハッパが言うのと嫌味に聞こえるナー」

「もう1ストライク余裕があれば必勝必打の大回転打法を出せたのですが……無念です」

「それはボール球で必ずストライク取れそう」

「フッフッフ……甘いです由美子先輩、私の大回転打法は……縦に回るんです!!」
「「?????」」

ものすごく得意そうな明日葉、イメージが湧かないユミ姉。ホールのチーズケーキを手づかみでわしわしとちぎっては食べちぎっては食べしつつもが笑う。

ちなみにケーキバイキングなんだけどこの人は特別扱いで、専用ベイクド・プレーン・チーズケーキを二ホール平らげから、バイキングスタート、というお決まり。それでもいつも、三〇ピースは固い。無論当人はダイエットを意識して、その数値だ。

「けどはっぱちゃん野球向いてるなんて意外だねー」

「意外にケダモノなんスよ。白球見たら目の色変えて追うもんで」

「甲子園だっけ行ってそうな気がしてきました……」

「あれ、甲子園って女子はダメなの？」

「どうなんだっけ？」

「ふふ、アメリカの高校生みたい。フットボールと野球とか。掛け持ちで」

「あー、バスケと野球とかね。サッカーと野球つてのは珍しいんじゃないかな、やってみる？」

「メジャーからスカウトが来たらどうでしょう……進路は父上母上と相談しない
とー」

「アハハ、夢デカスギー！」

「あつ、そういえばもも先輩、あの方は、どういう方なんです？」

この中では小食扱いのありすが苺のショートケーキをつつきながら聞いた。

「ほえ？ あのはは？」

「ちよつともも、そんな焦んなくてもバイキング逃げないから」

「んぐんぐ……ふあけどいつもみんなお茶モード入ってるのに私ひとり食べまくつてるの寂しいもん」

「今も食べまくつてるから同じじゃない」

「気分、気分の問題だよ。あーあ、この二ホールちゃんと食べるからお持ち帰りに

してもらえないかなー」

「それ主旨とズレちゃうってば」

「で、なんの話だっけ？ オレンジヨーグルトソース？」

「最終回にベンチに呼びに行かれた方のお話です」

ありすは良くも悪くもあんまり乗らない。貴重なツツコミと言え言える。

「あー！ サワちゃんね。」

超スーパーエクスプレス・剛速球ピッチャーなの！」

「へっつ！ そんな人居るなら最初から、あいや忍様でも十分凄いんですけど」

「どくせあたしやインチキ風車ですよ、フン」

「それがね、サワちゃん、ソフトはしないんだ……」

「はあ？」

ももはほんのちよっぴり、手元のふわふわしたケーキに目を落とした。

「……彼女、野球が好きなの。ソフトじゃなくて、野球がやりたいの」

「野球？　つて、硬式野球ですか？」

「そう。甲子園とかプロ野球とかと同じ、あれ」

「ふうん、女子野球ね……あ、そういえばこないだ、高校生が独立リーグのピッチャーになっていたね」

「そそそそ。あんな感じ。リトルリーグの頃からずっと野球一筋だったんだけど、ウチには残念ながら野球部が、あ、女子野球部が無いから……」

「あー……」

「というか、ある方がまだまだ珍しい。」

「1年の頭に『野球部入りしたい』つて言ったら、野球部は女子はマネージャージャやなきやダメなんだつて」

「んー……高校になると流石に男子と体格や体力が違うので、一緒にやると怪我とかの可能性もありますしねえ……サッカーだつてそうですし」

「女子は普通ソフト部ですよねえ。ウチみたく」

「オリンピックで金メダル獲っちゃう競技だもんね」

「そう、女子野球まだまだはマイナーなの。それでね、ずーっと独りで、練習して

るの。体育館の裏で」

「ハーッ……ストイックですなあ……」

でも校内大会ぐらいソフトやってもいいと思うんですけど……感覚がズレちゃうとか？」

「うん、それもなんだけど、

『中途半端な気持ちでやったら、ソフトボールに失礼だ』って」

「カーッ！」

千里、額に手を当ててのけぞった。このご時世に、そんな人間がいるのか。

「澤村氏はそんな真剣に野球のことを……」

武人モードに入った忍が、身を乗り出す。

「そーなのもー愛しちゃうてるんだよ。私のことなんかより……」

「もー、ももそれ止めなさいってば。またガチレズって噂されるんだから」

「わたしレズじゃないよう。みんな知ってるでしょお？」

「……」

ももは、女の子が、特に可愛い女の子や美形の女の子や魅力的な女の子が、大好き。飛びついたり、抱き締めたり、食べたり、する。

ただ、性欲的な感じは、しない。

どちらかというと、食欲。

同じだといえば、同じだけれど。

「ちよつと食べちゃいたいぐらいなだけなんだよ」

「もも先輩だとホントに喰いかねないからなあ」

「あつ、食べるだけじゃなくて愛でるよ？」

あーちゃんとかこのぐらいのサイズにして胸ポケットに入れて持って歩きたい
ね！」

「あはは、あは、あは」

首狩り族やあるまいし。

「あと胸ポケに挿しときたいのはユーミかなあ……」

「私？ 私そんな可愛い？」

「ううん、可愛さはどうでもいいんだけど、テストの時答え教えてくれそうじゃない？」

「もしそうなくても絶対教えない」

「じゃだんだん左の方へリストラするから！ 最後は鞆に挿しちゃう！」

「今も先輩の胸ポケにちっちゃい生首が四つ五つ並ぶすんごい嫌なイメージが」

「わかってもゆるみなみなガマンしてんだから！」

「そ、そう言えば澤村先輩は、とつてもカッコイイですね！」

「でしょお!? これ剥くとまたとびつきり美しいのこれが！ 全身ムキムキのくせにおっぱいもおしりもボーン！ボーン！で!! なんですかそれわ筋肉か脂肪かどつちかにしなさい、どつちも持つてるなんて反則！つて感じ！」

「だから剥くとか言わないのー」

「体操服の上からでも凄い体格されてると思いました」

「……球、速い？」

「新幹線ぐらい!!」

「……速いね。ふむ。とするときつと……ソフトでも、チーターぐらいは、出る」

「ねー！」

胡桃が主食のシュークリーム（二三個目）をほおばりながら言った。彼女も昔バスケではちよいと鳴らした女だ。地肩なら、負けない。

「てっちゃんなんか1年の頭からずーつとソフトやろうソフトやろう、つて今もああして誘ってるんだけど、未だにウンって言ってくれないの。別にねえ、いいと思うのにねえ」

「そうですね、あたし達でもフットサルやビーチサッカーしますし」
「ねえ！ねえ！」

可憐はユース代表に呼ばれる逸材だ。サッカーへのストイックさなら自負があるが、ちよつと追い込み方の方向が違う気がする。

「マ、イジになつちやつてるのかもしれないヨ。あんまりオセツカイやかないほーが」

「んー……でもね、サワちゃん口下手だから、ほおつとくとああやつてずーつと独

りで壁にボール当ててるのかなー、つて思うと、不憫でねえ……」

つてな具合に、ももは優しい。母性が服を着て歩いてるような存在で、だから後ろを彼女にまかせて、チームメイトはゴール目がけて突進できるのだ。

「じゃあ、チームの練習に、来てもらうのはどうですか？ サッカーはご興味ないかもしれないんですが、ランニングとか柔軟メニューとかご一緒するだけでも」

「おー、それいーね」

「えっ、それつて……いいの？」

古都の提案に、ももはケーキを両手で掴みながらぶんぶん首を振って周りを見回した。

「別に……拒否する理由は、なにも」

「他競技でも相当できそうな方ですから、刺激になります！」

「そっかあ！ それいいアイデアだなー！

……あつ、でもサワちゃんがノつてくるかどうか……」

「柔軟体操で上町大地と組めるとでも言えば、ノってこない女はおりませんぜヒッヒッヒ」

「ちーちゃん」

「ダメだよ、コーチは私のなんだからあ」

「ハア!?」

「……たまにはそんな冗談も言わせてよ、今ここには2年生がいないのだから」

「……2年生というか、大奥が」

「一人大奥」

「なんだろうねあの防壁はね。銀行のATMみたいだよね」

「なにそれ」

「あれさえ無ければ金庫から無限にお金が引き出せそうなのに」

「いやその例えはおかしい」

「えっ、ちよつと待っててください、今そういう冗談とも本音ともつかないものは言い放題なんですか?」

「オフレコ・オフレコ」

「ラブ!コーチラブラブコーチラブ!! ラブラブコーチラブコーチ!! パイポパイポパイポのシューリンガー!!」

「こつとんが、こつとんが壊れた」

「先着順じゃないから、落ち着いて」

「あつ、そう、こいつ、ありますまたエコヒーキ、またなんか一人サイン貰って！」

「「あーっ！」」

「ちつ、違います違います、あれは、たまたま、目が合つて！」

「嘘九百！ その前のナナ姉の野次ブッスルーしたくせに！」

「やじ？」

「うわーっ！ クローラーっ！！」

「えつえつえつえつ、わからない、わからない」

「フッフッフ……相手にとつて不足なーし！！」

「おつ珍しく明日葉ちゃんが恋バナに身を」

「必ず打ち崩して魅せます！」

「その魔球・新幹線ボールを！！」

「やっぱズレてんだよこの人はね」

「あーいいいいよ、サワちゃん投げる闘魂だから、そういうの大歓迎だと思う」

「もちろん打法は……太陽の塔打法！！ 技術立国ニッポンの夜明けですー！！」

「もう陽は沈みかけてんだけどね」

「はっばー、私のボールどこがダメだったー？ スピード？ 変化？ コース？」
「球質が軽かったですー。実戦的でない練習しかされてないのではないのでしょうか」
「」

「ぐわーんぐわーんぐわーんぐわーんぐわーんぐわーん……」

「アー、イツちやった……」

「みんなそれ思っても口に出してなかったのに……」

「忍の生き方全否定じゃない」

「みんなそう思ってるの!? みんなそんな風に私のこと見てるの!?」

「忍は偉い。すごく。それは認めてる」

「『それは』ってなに『それは』って!?」

「大詰めで二つも年下のド素人にほかすか連打を浴びるようでは、大事な場面は任せられませんねー」

「うあー……」

「はっばちゃん……」

「しっ、忍様、すいませんッした、打っちゃって」

「あ、あたしはボテボテの内野安打だから打ったうちに入らない」

「わ、私もズルしちゃったので、三連打にはなりませんよね。つるべ打ちには」

「あ~~~~~ん」

「君ら」

「ほ、ほら、しの、だつてしのも急造ピッチャーだったんだもん、ほらこの、カステラの裏の紙あげるから元気出して」

「本体をあげなさいよ」

「この紙にこびりついてるここ！ このホロ苦いカルメラ味が！ カステラの一番美味しいところ!!」

「もも姉様、カステラとかスポンジ系がお好きデスね。いつも寿司桶一杯分ぐらい」

「エレちゃん、私にとつてスポンジ系はケーキじゃないんだよ。ごはんみたいなもの。モンブランをおかずに、カステラを食べる。そしてまたザツハトルテをおかずに、ベイクドチーズを食べる」

「ナルホドー!」

「真似しちゃダメよエレ、太るから」

「もも姉様みたいなセクシーなスタイルになら、なりたいデス」

「ホラ!! ホラわかつてる!! エレちゃんはよくわかつてる!

母なる国ロシ

ア! ロシアなる国母! やっぱり心も身体も豊かだよ!」

「まエレもかなりキテるからなあ……もも先輩否定できないんだと思う」

「太股のぱつつんぱつつん具合ならいい勝負だし」

「私まだ体重は三桁ないデスよー」

「私だつて無いよ!!」

「……た、ぶん」

「「たぶん!」」

「えっ、無いよね!? このぐらいだったらまだたぶん、大丈夫だよね!」

「体重計で測ればいいじゃない」

「怖いよ。あれはジェットコースターより怖い乗り物だよ」

「大丈夫。死なないから」

「……あ。そーだねー!! ユーミやっぱり頭が東大だねー!

そか、三桁あつたつて、別に、どうつてこと、無いよねー!!」

「「あるわー!!」」

恐ろしい。

しかし彼女の体重はわからない。とにかく胸とか腰回りとかの立体構造がすごすぎて、この身長この肉付きならこの程度だろう、という常識が当てはめにくい。さ

さすがに三桁は冗談の範囲だと信じたいが……

「……安心したところで、五セット目取ってきまーす」

「「……」」

みんな、育ち盛りで、運動系だから、焼肉食べ放題なんか行くと、そこいらの男子がひっくり返るぐらい、喰う。でもね。

七号のホールを二つ食べた後に四〇ピース食べてまだ食べる、っていうのは、ちよつと違うと思うんだ。

「ハー、いつもながらもと居ると胸焼けがする」

「いーじゃん。熱い女だよ」

「ま、ね」

「……負けない」

「クーはたまにはシュークリーム以外を食べなヨ」

「おぜんざいとかおはぎが食べたくなってきましたー！　洋菓子と言えどもこれからは和菓子もできねばなりませんー！」

「私は、カツカレー……」

「もうやだこのチーム」

「ユーミだつて回転寿司で終わらないじゃん！」

「あれは円だから。円は、終わりが無いのね？」

「回転寿司行きましょうか！」

「エー、ケーキの後はラーメンっしょ！」

「揚げ物捨てがたいなー、揚げ物捨てがたい」

「じゃ中間取つてドーナツ！」

「もうさすがに小麦粉は要らないわ。お好み焼き行こ」

「そうですねー！ パワーをつけて、先輩方には是非是非優勝をー！」

「そおだあ！ あつしらの分まで頼みますよ先輩方ー！」

2年を、ブツ倒せー!!」

「えっ、でもまだ2年選抜が相手と決まったわけじゃ……」

「教員選抜ごときがああ妖怪変化共に敵いますか」

「知ってる？ 一番から六番までウチのチームだよ。」

堺・美原・天満・難波・和泉・長居」

「改めて見るとホンットヤなラインナップだなそれ目眩がする」

「大奥がまた六番に座つてるのキッチンでしょ。クリーンナップ終わらないの」
「こりやどう考えたつて澤村さん引きずり込むしか勝機無いわ」

わいのわいの。

「……ど・れ・に・し・よ・う・か・な・〜……
ぜんぶ♪」

ドルチェ『エスポワール』は、ミラクルズの公式スポンサーです。

宣伝効果でとても繁盛してますが、こうしたスポンサーフィーを厳密に計算する
と……

■ 3 ももの誘惑

「えっ……練習に？」

「うん！ ぜひぜひ！」

「けど」

澤村栄（さわむら・さかえ）は視線を逸らして、いつものように大きく振りかぶって、渾身のストレートを……

バシーンツ!!

壁のくぼみから跳ね返ったボールが、山なりに帰ってくる。

「……邪魔に、なる」

「ぜんぜん！ むしろね、練習ってマンネリだからね、みんな刺激が欲しいの！」

「……」

今度はセットアップから。

……キュツ。

ひゆるひゆるひゆるひゆるひゆる……

ぱこ〜ん。

コロコロコロコロ……

天井から降り注ぐような大きな縦のカーブが壁に当たって、グラウンダーが転がってくる。

「サワちゃんだつてこればかりだとつまんなくない？　ね？　たまには、いいでしょ？」

「んー……私は、別に」

「ほらほら、人見知りばかりしていると、オールスター・ゲームの時、壁相手にピッチングして見かねた誰かがキャッチボールの相手してくれちゃったりするよ？」

「フツ」

今度はスライダー。

キュツ、と打者手元で鋭く曲がったボールが、壁で斜めに跳ねる。しかしそこはもう三年もこの練習相手になつてくれている壁。左手の溝でぽーんと跳ね返り、まるでビリヤードの球が手元に帰ってくるように。

「おー、すごいすごい」

「いや」

栄は、なんとなく、ももの狙いは、わかっていた。

普段から仲はいい。いつもももが一方的にしゃべりまくるだけだけど。

つまり、最終的にはソフトボール・チームに引き込みたいのだろう。練習はやぶさかではないが、関わってから最後イヤです、というのも気が引ける。

「……サワちゃんひよつとして私に下心あるな、とか思ってるでしょう」
「いや」

「ふふふ、無理もない！ あるから！」

「……ははは」

シュツ……

シュートが、今度は逆に、右の廊下の柱に当たって、帰ってきた。

「すごいすごい」

「……」

ももには敵わないな。

……まあ、もう、無理して意地張ることも、無いといえば、無い。

「……ちよつと」

「休憩？ はい！ 差し入れ！」

「……はは」

いい、と手を振ろうとして、その手で、受け取った。スポーツドリンク。余計な

お世話だが、お世話だ。

「私もお相伴」

「またネクター？ 太るよ」

「いーの。なんとたつて今日は練習でカロリー爆消費だから！」

見るからにドロドロの液体を美味しそうに口づける。

「……行くよ。私も『ミラクルズ』、興味あるし」

「ゲフツッ！ ホ、ホントに!？」

うわあ、こんなカンタンに話が進むとは思わなかったよ！ あと六段ぐらい作戦を用意していたのに!!」

「はは。」

「……や、もう、いいんだ。意地張る理由、無くなっちゃつて」

「へ？」

「……つて、聞いて、いい？」

「ん。今年のクラブチームカップの締め切りが、過ぎた」

「あぁー……」

そういえば、言っていた。

女子野球にもサッカーの『クイーンズカップ』に相当するオープン大会があつて、プロアマ問わずどんなチームでも参加できると。

「……私には所属チームも無いから、別にそれでどうつていうわけじゃないんだけど、なんとなく、あれには、出られるような気がしてたんだ」

「夢、だね！」

「……夢、かな。」

そう、夢は、終わり」

「サワちゃん……」

同じように、小学生時分から名前が売っていた難波鳴海は、強豪校からの誘いを蹴つて、何も無いここへ来た。そしてキャプテンと共謀して、一からいやゼロからミラクルズを築き上げ、現在全国制覇の見果てぬ夢を目指して慕進中。

ただそれは、ナナの強烈な押し出しと才能とチームに降り注いだ驚くほどの幸運

がシナジー効果を生んだ結果で……誰にでもできるものではない。

「いやあ！ 終わってない！ 終わってないよサワちゃんの夢は！

うん、きつとね、えーつと、そのー……」

「はは。

……こんなところでポカポカしてても、なんにもならない、つてことは、自分が一番よく、わかってただけだね」

「ううん、そんなことないよお！ これはね、この厳しい下積みの日々は、グランプリの栄光への一里塚なんだよ！」

「はは」

立って、振りかぶった。

……やはり、どこかクラブチームを探して、一からやり直そう。

原因は、一歩、踏み出せなかった自分。

ビューーーン……

パーパーン!!

「……だってそのストレートがあるんだもん。そのカップ戦だって優勝できるよー!」

「ダメダメ。ももはレベル知らないから。今はこんなんじや……」
「えー……いうるさー……い!!」

「……」

振り返ると、あの温厚なももが、唇を尖らせて、膨れていた。怒って……いるのかもしれないが、ユーモラス。

「そんなのやってみなきや、わかんないでしょう!」

「……」

「とりあえず!! 今日!! 私達と!! 練習!! するの!!」

「……は、はあ……」

「返事は!! しっかり!!」

「は、はい」

「よし!!」

「ビシ・バシ・しごいてやるから!! 覚悟しなさい!!」

「いや、私は、サツカーしごかれても」

「足腰ーーーーー!!」

人生とピッチャーに必要なのは足腰と糖分だーーーーー!!!」

「は、はい……」

確かに、嘘、では、ない。

「もホントにサワちゃんワガママなんだから!! ピッチャーって人種は、どうしてみんなそうなんだろう!？」

「わ、ワガママ……かな」

「そうです!! ほらずーつと独りで練習してるから、なにが団体行動の和を乱すのか、それすらもわからなくなっているよ! そんなことでワールドシリーズを勝ち抜けますかー!! チーム・スポーツの基本はチーム・ワークですよお!」

「……ワールド……シリーズ……」

急に、恥ずかしくなった。

以前「夢は」ともに聞かれて、ありのまま「ワールドシリーズで優勝決定投手」と呟いてしまった。あまりにもバカげた夢だ。そもそも、女子の野球選手だつて、NPBにもまだ……

でも、恥ずかしくなる、ということは、わずかでも現実味がある、つてことで……

……
そんな気にさせるのが、さすが梅田もも。

彼女は確か今、全国制覇目指して一步一步階段を昇ってる。
そうだ。

階段は、昇り始めることが大切で。

とにかく昇り始めなければ、二階にすら辿り着かない。

「……ん。……わかった。今日は、行くよ」

「よし！ その意気だ!!」

サワちゃんも遠慮は要らないよ？ ウチの子達にビシ・バシ言つてやつてくれていいから！」

「そんな、私サッカーはホント遊びでちよつと……」

「サッカーに必要なのは足腰と糖分だー！！」

遊びとか経験とか、そんなものは要らなーい!!」

「……はは」

その言葉に真実は少ししかない。

でも、こういう時に必要な言葉は、真実ではない。

キャッチャー、居て欲しかったな。ももみたいなキャッチャーが。

そしたら、この三年は、全然違ったものだったろう。

なんだか肩から、力が抜けた。

「……ひよつとしてプレーが認められたら、入団とかしなきゃいけないの？」

「おおっ!? サワちゃんなら超ウエルカムだよ!? パワータイプ全然足りないの

ウチのチーム特にDFに! すぐレギュラー獲れるよ! 同じパワータイプの蘭ち

やんとコンビ組んでね、えー……えー……じゃ私どこ守るんだ? や、やっぱりミ

ッドフィール……MFは無理だなあ、層が厚いしなあ、あ、でもデイフェンシブな

ら……いやあ、ユーミ怒りそう……じゃフォワー……うーん……うーん……」

「ははは、冗談、冗談」

「いや、コーチに袖の下を……いや! そう!」

「サワちゃん、脱ご！」

「ぬ、ぬぐ？ つて？」

「サワちゃんのカラダ見て興奮しないコーチは居ないよ！」
「やだあ！」

「……プツ……」

「……アハハ、アハハハ、ハハ」

「ああつ!? へ、変な意味じゃないよ!? 筋肉、筋肉とか凄くて絞れてる、つて意味で!!」

「あはははは、あはははは」

「も、もー、サワちゃんヘンタイだよ!! そしてタイヘンだよ!!」

「あはははは」

栄は、ここ体育館裏で、笑った記憶が、無い。

■ 4 スポーツ乙女罨に掛かる

「……と、いうことで澤村栄さんです！」

「おおーっ」

拍手が沸いた。栄、照れて頭を下げる。

「お邪魔にならないよう精一杯やります、至らないところは怒鳴ってください」

「エエ身体したはりまんなあ！ ウチ入りませんか！ すぐレギュラーだっせ！」

「負けないよー！」

「あはははは」

「いや、そんな……」

もつとピリピリしたものかと思っていたら、まるでのんびりしている。

「どうぞよろしく。わからないところはももにでも聞いてください。今日のメニュー

「はボール扱いは少ないはずですが」

「はい」

噂のコーチとやらは、改めて近くで見るとものすつごい美男子だ。美形の癖に肩幅が広くて姿勢がよくて全体的にシャンとしてて、なるほど、これじゃあ学校中の女子が騒ぐのもよくわかる。声もいい。甘くてよく通る。

——ランニング、ストレッチ、各種ステップ、一対一パス交換、サークルパス交換……

『……密度、濃いな』

よく練られたメニューなのだろう。へばる寸前飽きる寸前で次のメニューへ次々移る。久しぶりに心地よい疲労が、蓄積していく。

ちらり、見ると、さつきまでヘラヘラ笑ってた選手達も真剣そのものの顔でメニューに没頭している。

『……こんなに、変わるものなのか』

……ピッ!

「5分休憩、8―8ミニゲーム。いや、8―9か」

「じゃウチサボりまーす」

「いや。……古都、出撃」

「はあい」

「コーチはどうですかー？ 澤村さんとバランスでー」

「む。……そうだね」

「「おー!!」」

目を輝かせるチームの面々。コーチの実践は……たまたにGK練習とかセットプレイ練習とかであるけど、ミニゲームではちよつと記憶にない。

噂だけだ。

昔は、相当、できるプレイヤー、だった、らしい。

キャプテンとかはその事実を知ってるらしいけど、聞くといつもはぐらかされる。

——大急ぎでジャージ姿に着替えた上町大地を交えて、9対9。今日は黄色のビブスのオフフェンス・チーム対、ピンクのビブスのデイフェンス・チーム。

「……………ご希望の番号があれば……………」

大きなおさげのマネージャーの子がビブスの束を手に聞いてくれる。

「なんでも。」

……………あ、14番があれば」

「はい。……………胡桃さーん、今日12番でいいですかー！」

「ん」

「あ、先約あるなら、私は」

「いえいえ。今日はおお客様ですから。」

……………はい。なにかこだわりのある番号ですか？」

「……………まあ」

「そうなんですかー！ サッカーでは、それはヨハン・クライフってレジェンドの

番号なんですよー！」

「そうなんだ」

栄はももとデイフェンス・チームのセンターバックを組んだ。前には長居キャプテン。コーチはオフセンス・チームの最後列に入った。女の子達の中に入ると、一際目立つ。

「……サワ、私指示出すから、ボールとゴールの真ん中に自分入れるようにしてて」

「わかった」

あのももまでも、まるで別人だ。

試合が始まる。

目まぐるしい。

ハーフコート。狭いスペースで多人数が殺到するので、フットサルのように攻守が頻繁に入れ替わり、カラダもアタマも忙しい。

『……す、すごいな』

練習と言つても、これは、ゲームだ。

さつきまでと選手達の顔つきが違う。

まるで獣だ。真剣とかそんなじゃなくて、本能。

勝ちたいという、ゴールを決めたいという、いや目の前のボールを、奪いたいという。

血が、沸いてきた。

久しく無かった、感覚だった。

ゲーム。そう、試合。

試合が、私には、足りなかった。

夢中で、ボールを、追った。

「サワツ!!」

「あつ」

深追いしすぎた。

小さな背を向けた1年生が——21と書いてある——踵で、自分の横手へ、パスを出した。それに食いつくキツネ……9番。

手を引っかけて止めよう。

そんな素人考えが通用する、エース・ストライカーではない。

ブンツ!!

『……えっ?』

えっ、えっ、えっ』

視界から、消えた。

まさか、まさかと思いつながらゴールを向いた。

もう、背中が、小さい。

そして、シューツ……

バサーーーーーッ!!

ああ、その足元に飛び込む巨体。ももだ。身体ごと足元に投げ出して、ダムと化して止める。

「……あ、ありが」

「サワその3番止めて！ あ、いい！ コーチ止めて！」

「あつ、は、はい！」

すぐCK（コーナーキック）。大慌てでゴール前に戻る。コーチ、に、近づくと、そのガツシリした体格から考えられない機敏さで、逃げる。追う。身体がぶつかる。微動だに、しない。

なにこれ、岩？

ガツガツぶつける。フツ、と引かれて、バランスを、崩す。

ボールが、上がった。
いけない。

「あーっ!!」

使ったことのない筋肉を全部使って、跳んだ。
もちろんターゲットはあのコーチ。

あ。

ボール、全然、ちが……

ドーーーーーッ!!

コーチと3番を囷にして、飛び込んできたのは、金髪の女の子。
恐ろしい跳躍力で妙にオシヤレに飛び上がると、両手をクロスして胸に当て、身体をねじるようなヘディング・シュート。決まった。

ワーツ!と敵陣が、ささやかなゴール・セレブレーションを愉しんでいる。

ぽか～ん……

あまりにも物事のペースが速すぎて、ついて、いけない。

「……す、すみません」

「は？」

「……どいていただけると」

「は……あつ!! すつ、すみません!!」

「いえ」

上町君の身体の上に乗ったり乗って、呆然していた。

「ちよつとサワちゃん何ドサクサに紛れてセクハラー!!」

「いやっ!? いやっ!?」

「えーつマジでー!? 油断も隙もねーッ!」

「いや、いや」

「ハッ!? そうじゃん!? そっちのチームだったらそんなことも起きるじゃん

!？」

「澤村さん代わってー!!」

「あ、いや……」

と、思えばさつきまでのようなおちやらけた雰囲気にもなる。あまりに切り替えがクイックだ。

コーチ君は、どうもかなりセーブしてるくさい。息一つ上がらず、ずっと「ただ存在している」という感触を、キープしている。その代わり四方に目を配って、選手の動きを見ている。

『……凄いな……』

あれだけ「見られて」いれば、それは気合いも入るだろう。手を抜けば、バレるし、おそらくたぶん……いいプレーをすれば、誉めてもらえる。

『……いいな……』

彼女たちはあんな監督に見つめられながら、チームメイトおたがいで声を掛けあいながら、好きなサッカーを……

なんだか、視界が、ぼやけて、きた。
ぐすつ……鼻も、鳴る。

「サワ！ まんなかみててー……」
「……おう!!」

叫びながら左サイドへ走っていくも。7番おさげの子がボールが脚に吸い付いてるようなドリブルでタッチ際を上げる。こちらの5番とももとがそれを押さえに掛かる。

センターリングを上げられたら、危ない。
素早く見回す、
さっきの、8番、3番、コーチ……

「エレを!!」

背後から声が飛んだ。カタカナの名はたぶん8番金髪の子だろう。ゴール前に駆

け込む彼女を追う。だが目は、7番の目を見た、まま。
違う。

見てる見てないじゃない。まるで「雰囲気」がない。

一か八か、ええい、失敗しても私は素人!!

8番を離して、後ろの子が位置的に3番を見てくれてる、じゃ……コーチ!!

ボン!

とセントリングが上がる。案の定8番の頭は素通りして……

今度は悪ノリしてみた。時間と体勢の余裕もあった。

思い切り身体を伸ばして、まるで結婚式、新郎に飛びつく新婦のように……

「わあっ!!」

撃墜。

あつ、違う、3番だ!!

ヒュツ——

人間にそんな動きができるのか、と目を疑った。

こちらの17番を踏み台にして、今まさに獲物を食い千切らんと飛び上がった百獣の女王・雌ライオンに対して、それよりはかなり小さな、だが狡猾で抜け目なくサバンナでどの動物にも恐れられてるハイエナみたいなケモノが……背中には10つて描いてある……跳躍一番、その喉元に喰らいつく。獲物を、もぎ盗らんとす。

ヘッド・ボール・ヘッド。

いや、まだある。

ライオンとハイエナの力比べは互角、ボロリと落ちる果実に向かって……7番。もう、来てる。

「ジャアツ!!」

目にも見えない鋭い振り足、ノータイムでシュートへ持ち込む。ああ、これはダメだ、獲られた……

パーーン!!

……にや……

……ペナルティエリア内フルスピードのそのシュートを、顔面真正面でびたり、キヤッチしたGKが、啞つた。

背筋が、ゾクゾク、震えた。

ほんの一瞬が、何十分にも、感じられた。

『……す……ご……』

もう何度同じ単語を口にすれば気が済むんだろう、私は。
もつと国語力が欲しい。他にこの感情を整理できる言葉が欲しい。

「……あのう」

「は」

「……できれば、どいていただけると」

「は。」

「……わ、わああ!! ず、ずいませんっ!!」

「いえ」

「またサワちゃんセクハラ大魔女王……ッ!!」

「「ええ……っ!?」」

「いや、いや、あの」

「明日葉がエレ見ろって言ったのにコーチに突進していった」

「「うええ……っ!?」」

「も、守口さん!?!」

いや、それは、そうなんだけど、そうなんだけど。

「あの、ちが、その」

「まあまあ。澤村さんの判断素晴らしかったよ。間違っていないです」

「あ、そ、そう」

さすがキャプテンだ。ちゃんと見てる。さつきのハイエナ・バイティングからは想像もつかない優しい笑顔で取りなしてくれる。コーチも笑顔で、

「うん。今のはいい判断だったと思う。

澤村さん、遠慮なくどんどんぶつかってきてください！」

「は、はい……怪我、ないですか」

「ええ。澤村さん見た目よりずっとやわらかいので」

「こうたー……い!!」

「蘭ちゃんと澤村さんこうたー……い!!」

「イヤッホウ、ボクもコーチに抱きついちゃお」

「あ。

「こうたー……い!!」

「引き続き蘭ちゃんと私こうたー……い!!」

「「コラー……!!」」

『……みためより、ずっと……』

頬が、頬の上の方が、なんか痛い。

なんだ、なんだろこれ。

怪我かな。どっか切ったのかな。どっか打ったのかな。

『……あーあ。またひとり。』

犠牲者が。

古都、真つ赤なんて表現じゃとても追っつかないぐらい茹で上がってる澤村先輩の顔を見て、ため息をついた。

たぶんあれ本人全然気づいてないんだろなあ……

まあ私達もね、よくおんなじようなことになってるとは、思うんですけど。

ほんとコーチってば天才としか言いようがない。

なんの天才かは別にして。

『……あ、でも澤村先輩さすがだなー。あのレベルついていけるんだ』

仮にもユース代表二人を含むミラクルズ攻撃陣の強襲を、なんとかかんとかさば
いてる。これつまり全国レベル、つてことで、やはり相当なアスリーテスだ。あ
んな逸材が埋もれるのは、野球界の損失ではないのか。

『……もつたないよねえ……あ。そーだ』

ウチには、『できないことはやらないことだけ』を豪語するプロデューサーが、
居るじゃない。ちよつと相談してみよう。

ま、ただ、問題はあの人風呂敷を拡げるのがスngoイ大好きつてこと……

『……まあ、その方がいいよね。

……おもしろいし』

もうすでに、まるで長年センターバック・コンビを組んでるかのようない連携
を見せる梅田先輩と澤村先輩の動きを見つめながら、古都はいろいろ、悪巧み。

■ 5 外堀を埋める空堀

「……こーち♪」

「ん？ なんだいこつとん」

「あのう、ですねえ、ちよーつとおつきあい、願えませんかあ？」

「ん？ ここじやダメなの？」

「ええ、ちよーつとお」

「はあ。うん、いいよ」

中身知らない男性ならゴロゴロ転がる超甘ったるいアスパルテーム声を出す古都について、大地は教室を出て行った。ツツコミを入れようとしたナナは、三十六の肘に突かれる。

「……総員注目!!」

「「なにになに!?!」」

顔を寄せ合う、昼休みいつもの車座の2年生。中央は、空堀三十六プロデューサー。
1。

「……えー、皆さん野球に興味はありますか」

「澤村先輩絡み？」

「鋭い。さすがキャプテン。実はこのような物がございました」

昨日プリントアウトした紙を出す。

「全日本都市対抗女子クラブチーム野球大会」とある。

「まさかこれに出るつちゅーの？」

「YES」

「ハハーン、あたし達が後ろ守るのね？」

「YES。どないなもんでつしゃろ……って、訊くまでもないか」

全員なんかえらいニコニコしてる。

「ボクは全然OK」

「野球、楽しそう」

「ま、たまにはね、違うスポーツやると、刺激ある」

蘭、愛、はなが賛成、主将も。

「……うん。いいと思うよ。昨日一人入ってくださっただけで全然気合い違ったしね。モチベーション上げていくのは大切だよ」

「流乃ネエは？」

「ドーセスタメンは3年で固めるんでしょ？ いーよ責任無くてめんどくさく無きそうだから」

「いつも変わらぬ本音トーク恐れ入ります」

「……でもこれ申し込み締め切り期日とつくに過ぎてるよ？」

「フッフッフ……そこはほれ、闇の力で!!」

「またはつぱんとこのお爺ちゃんのお力借りるんかいな！ あんたエエ加減にしときや、しまいに怒られんで！」

西九条財閥にできないことはない。孫娘の誕生祝いにデイズニー・ランドを誘致しようとした旧家である。

「つてか西九条の爺さん俺行つたらめっちゃ喜ぶねんて。こないだも漱石三部作について四時間」

「漱石？ 文学？」

「うん、趣味で研究したはんねん。全然ついていかれへんねんけど話聞いてるだけで喜ばはんねん」

「あーアマチュア研究家によくあるタイプだねー」

「しまいには婿に來んかと」

「あんたー！ー！」

「無理無理、俺超庶民、無理無理、はっばちゃんも、無理無理」

前者はともかく後者はみんな納得だ。

あの娘の旦那は、かなり気合いが要るか、同じ宇宙人か。

「そんなことでむしろなんかお願いしにいったら喜ばはるから、心配は要らん」

「……となると問題は縦縞か」

「ユニフォームは澤村先輩の希望が最優先です」

「いやいやあ、野球のユニフォームなんてものは縦縞にしといたらいだいたいOKな
んですー！」

「いや俺としては赤・青・白のトリコロールが捨てがたい。ええやろ？ フランス
代表みたいで」

「野球ではその色はあかんねやー！ 滅びの色彩やー！ 永遠に日本一になれんカ
ラーリングやー！」

「それはもお言うなー！ 日本の誇る機動戦士カラーとでも思ええ！」
「まあまあ。」

で、なんで大地を引き離したの？」

「そらやつぱり怪我の可能性とか考えると、すぐにはあんまりエエ顔せえへんかな
と。外堀埋めてから、つちゅーか根回し、つちゅーか」

「なるほどね。みんな賛成ですよ、とくれば反対はしづらいわね」

「そそ。ご協力痛み入る」

「でも大地君こういうの結構好きだよ？」

「いやいやキャプテン、あいつはミラクルズのことになると人が変わりますから。」

念には念を」

「まあ、ねえ。で、後で説得するの？」

「ああそれは俺がテキトーに」

「私やろうか？」

「いや大丈夫、たぶん。作戦考えてあるので」

「あ、そうそう、野球で思い出した。

……これ、ほら、澤村先輩の投球フォーム。メモリ持ってきたよ」

「「お」」

匠が、いつも持ち歩くそのプロ・デジタル一眼の液晶画面を見せた。

「おおう、ダイナミック！」

「カックイイイー！」

「へえ、ホントに本格派なんだね」

「いやだって昨日だって凄かったじゃない身体能力ー。蘭ちゃんとかくーちゃんにも全然負けてなかったし」

何枚かある画面を送っていくと、連続写真のようになる。どこを切ってもメジャー・リーガーだ。流乃がカメラを手に、ポチポチと写真を送り戻しする。

「……いいフォームだね。激みが無い」

彼女は昔陸上をやっていたので、フォームチェックはうるさい。

「……こうして観てると、動画機能が欲しいね。ね、三十六？」

「あかんあかん！ J1は名機中の名機です！ しばらく使いこなさない!!」

「えー、だつて無い機能は使えないよー。カメラ用のレンズ使えばあ、被写界深度深くできるからあ、映画みたいなボケ味のすつごく雰囲気ある動画が……」

「コンデジについで動画機能を使いこなしてから！」

「ダメだよ道具はいいの使わなきゃダメって、いつも三十六言ってるじゃない！」

「でじたる」ととんと縁の無かった匠も、いざ使い出せばまさに己の目・己の指

先・己の心臓、貪欲に知識と技術を吸収して今やデジカメ情報においてはガジェット・オタク三十六よりも詳しい。最近は動画に興味津々、まるで嫁はんにオモチャ

「あははははははは」

「えつ、ちよつ……」

ギャーーーーーッ！！

そこに写っていたのは、普段こんな顔二〇〇〇%しませんという、まるでちよつぴり「私可愛い」的自意識過剰気味女子がブログに載せそうなアヒル口・上目遣いしかも眉ちよつと歪めた甘え顔で、画面右2/3ぐらいどアップの、美原はなこ委員長。

「ちよつ、やめ、ちよつ」

「あーこらあ動画欲しなるな、うんうんわかった、次期予算では考えるから」

「ちよつおつとおお！ 流乃おおお！ 返せええええ!!」

「これ匠のだから。はなに返す理由無い」

「えつ？ なに？ ……あーこの写真？ いいでしょう」

「「はあい、とつても」」

「「こおらああ!!」」

「はなつてき、服のセンスいい癖に、自分の写真のセレクトションのセンス悪いんだー。いつつも素立ち全身図で遠く見てるみたいなどーでもいい写真ばっかり『これがいい』ってゆーから、一枚はなんとしてでも『普段の表情』を撮ってやろう、って」

「なるほど、なるほど」

「あー！あー！あー！あー！あー！」

「構えずにね、カメラ肩の上に乗せて手休めてるふりしてばしゃつと」

「すばらしい」

「あー！あー！あー！あー！あー！あー！あー！あー！あー！」

「も・えーがんハナちゃん一枚ぐらいー。ウチらかつてありますよ人前で見せにくい恥ずかしい写真がー。ねーあんた」

「ま、まあな。俺がカメラクラッチ掛けられてる写真とかな。ええやんか仲のええ証拠、仲良きことは佳き事哉」

「それはいいの！ その写真はいいんだけど!!」

「……あ。」

ガタタツ！

「好きな監督！」

「うーん、よく知らないなあ。王さんとか、長嶋さんとか、野村さんとか、名前聞いたことあるだけで」

「そおですかあ……じゃあもし野球チームを指揮するとなると、一から研究が必要ですねえ」

「あはは。まあ、そんなことがもしあるとしたら、そうなるね。素人もいいところだよ。ヒットエンドラン？とかつて、何か知らないぐらいだから」

「でも、こーちは人心掌握やモチベーション・コントロールがもの凄くお上手ですから！」

「いやいや。サッカーならね、ある程度経験でここで何を言えば盛り上がるかわかるけど。野球はねえ」

「こないだありすちゃん盛り上がってましたよ？」

「あはは、あんなの偶然じゃない。」

「……ところで、なんの話？」

「ええまあ、野球の話なんですけど」

「はあ。」

「そうだ！ 背番号で好きな背番号とか!!」

「え？ う、うーん特には……」

「あえて強いてとりあえず言うとう！ お好きな番号でいいです！」

「うーん……」

「思い入れのある数字とかでも！」

「んー……」

「じゃ、6番……かな」

「あ、6になにか思い入れが」

「いや、思い入れというより……うん、まあ、思い入れみたいなものかな？
にどれか選べって言われたら、つてぐらいで」

無理

ちよつとだけ、コーチは笑った。すこし寂しそうに。

なんだろう？

「ちよつとよかったです！ 6なら、ウチのチームで被りませんから！」

「ああ、そうだよね、ウチ6居ないんだよね。なぜか。」

……つて、なにがちよつどいいの？」

「それはほんのしばらく秘密です。あとはサイズとか大体わかってるし……」

「サイズ？」

「いえ！ だいたいOKです！ お忙しいところどうもありがとうございます！
た！」

「はあ。……これでいいの？」

「はい！ 大変参考になりました！ では！ 失礼いたします!!」
「は、はい」

走り去るこつとん。

なんだったんだろ？

——で、教室に帰ってみると、はなちゃんが泣いてる。

「うあくくくくくん、うあくくくくくん……」

「もおおおお、こんなことぐらいで泣きなや子供やあるまいし!!」

「だって、だって」

「どしたの!？」

「あつ、ちょー大ちゃん聞いて」

「コーチみんな叱って!! 私の、私のプライベ―……うわくくくん!!」

「そやから泣きな、て!!」

「三十六、どういう」

「いやあ……ヨダレ出ちゃうようなエロ写真が見れるかな、と思たら」

「ヨダレの写真見ちゃったのよ」

「うわー……うわー……ん!!」

「これ」

「だから見せるなあああああ!!」

首のそこヨレヨレでダボダボのTシャツで机に突っ伏して盛大にヨダレを垂らす美原はなこ。ズレた黒縁眼鏡がまた喜劇役者みたいない味だしてる。顔は、なんの夢みてるのか、異常に幸せそうだ。

「……ああ……いい写真だね。匠、やつぱスゴイヤ」

「そお?」

「喜ぶなあああああ!!」

「こんなしょーもない写真で期待させてからに……泣きたいのはこっちやで!」

「もう死にたい……」

「これがはなちゃんの本当の姿なんだね……」

「違う!!」

「まあエロ写真ゆうたらエロ写真やわな、人に見られたくない本当の私……
だけどタクミくんになら、安心しきって見せちゃう!!」

「ちがーうー!!」

「だって見せてないもん! そんな姿見られてるはずない!!」

「そりゃあなた寝てるじゃない」

「違うの!! その日その時その場所に匠なんか居なかったもん!!
いつの間にか撮られてるのーーーーッ!!」

「は？」

「……どうやって撮ったの、タクミン」

「さあ……それは企業秘密♪」

めっちゃ嬉しそう。

でもそれって……犯さ……

「今消してもらえばいいじゃない、おはなちゃん」

「だって、だって『消して!』って言ったら

『いいよ、もつと『いい写真』撮っちゃうから』

って脅すんだよ!? 脅迫するんだよ!？」

「脅迫なんかしてないってば〜」

天然温泉が頭から湧いている。

怖い。ホント大自然の力は怖い。

「カメラマンって……因果な商売だね」

「監督ほどじゃないよ。」

「いわば傍観者だから。責任何も無い」

「あるよ!!」

「「わははははは」」

「笑い事じゃないってば!!」

「たくみんこれ携帯の待ち受けにせな」

「あ。忘れてた」

「やーーーーーめーーーーーてーーーーー!!!」

怒鳴り散らすはなこの横に、美緒気づく。一番悪ノリすべき人物が、手を顎に思考を巡らしている。唇の端に変な笑いを浮かべ。

『……あまた空堀君なにか悪巧みしてる……要警戒、と』

この人もウチのチームに縁があるだけあつてアクセルを踏みすぎる癖がある。こないだなんか大地君相手の新婚若妻を全く嫌々ながらしようがなく無理矢理演らされた。あんな目に誰かが遭つては、いけない。私だけに、とどめねば。私だけに。私だけが。

■ 6 説得させようと説得する

——放課後、早速体育館裏に来てみた。角を曲がると、カーン!! という金属音が断続的に鳴る。これが噂の。

ビュワー————ンツ!!
カアアアアアアアアアアンツ!!

『……すうつげ!!』

ストレートが、壁にめり込んで回転し続けている……そんな幻覚すら、見てしま
う。

三十六は趣味スポーツ観戦と言っても過言ではないほど種々のスポーツ大好き、もちろん野球はプロ高校メジャー大好物だが、こんなピッチャー、見たこと無いぞ。そしてまたフォームが写真で見たより遥かにダイナミック。左足を天高く真っ直

ぐに上げ、振り下ろすと同時に、右腕が薪を叩き割る無骨なナタと化す。効率性・スムーズさ最優先の昨今では珍しい、躍動感溢れるカタチ。観る者の心も動く。

びゅーーーーーーーーーん……

カーーーーーーーーーーん!!

おお、あのカーブを見よ。

まるで天から降るような。

もちろんプロの球をブルペンのごときこんな間近で見る機会は無いけど、それでもこの迫力。スピードもさることながらいかにも球質が重そうだ。

てか野球部は何をしとんねん。この人おつたら今年甲子園行けたんちゃうか。

「……ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……」

肩で息をして、タオルで玉と噴き出る汗を拭う大柄な女性。彼女が。

「……あのう、澤村先輩？」

「……あ、はい」

怪訝な顔で振り向く。間近で見るとなるほどピューマのような野性的な雰囲気だ。眉が太く濃く黒目がちの瞳も大きくバタ臭い顔立ち、ショートヘアの髪はシャギーもバサバサ気味で、でもそれがすごくよく似合っている。

「あの、僕ミラクルズの雑役夫の空堀三十六と申します。昨日はウチのチームに参加していただきました」

「あ」

ぺこり。深々と頭を下げてくれた。

「ミラクルズ」の名が出た瞬間、表情が変わった。

「お忙しいところどうもすいません、ウチの梅田が無理言いましたようで」

「とんでも！ 楽しかったです。でもものおかげで」

手を胸のあたりでギクギク振った。

「しかし物凄い球投げはりますね！ 将来はメジャー・リーガーですか」
「いや、いや」

照れてる。真っ赤に俯いて振る手の速度を上げた。

「……なんか、昨日、気合い、入っちゃって……」

消え入りそうな声で説明してくれる。なるほど、先輩にとっても良刺激ではあつたらしい。

なら、話は早い。

「……それでいきなりモノは相談なんですけど澤村先輩。

……これ！

出ませんか」

例のプリントを突き出した。

「これ……」

目が、輝いた。

うんうん。それで、いい。

「……でもこれ、もう、エントリーが」

「それが世の中には抜け道アゼ道けもの道がございましてねえお代官様」

「は、はあ……」

「出る・出ない、どちらですか!!」

「えっ!?! で、でも、私、ひと」

「すいません間違えました!!」

「出たい・出たくな、 DOTCH!!」

「あ……」

そ、それは、

……で、たい、けど」

「よし決まり!! 出ましょう!!」

一日中球ばかり放つてた栄と、一日中对人交渉してる三十六では勝負にならない。栄、丸め込まれる。

「で、でも」

「細かいことはぜーんぶこの空堀めにお任せを! 澤村先輩は当日ぶーと現地来てその魔球を思う存分投げ込んでくださったら、それでええんです!!」

「そ、えと、あの……」

「ああ、申し訳無い二つだけ! 小さいお願い二つだけお願い聞いて貰っていいですか!」

「あ、は、はあ」

「一つはユニフォームのデザインのことなんです。

ご希望あれば! どーんなご希望でも叶えて見せます! もちろん背番号も思いのまま!」

「あ、ああ……」

「お願い」と言われてどんなことかと身構えた栄、緊張を解いた。とはいえ、デザインなんて、いきなり言われても……

「ファンのチームがあれば、そのレプリカでもいいですよ？ やっぱりジャイアンツ？ それともタイガース？ 栄光のライオンズ八〇年代モデルとかどうです？ いやあ今は日ハムの非対称とかカツコイイツスカねえ！」

「……」
「もちろん僕のオススメはですね、大阪がつく前の近鉄バファローズ最強無敵伝説の八九年モデル・エンブレムド・バイ・タロー・オカモトツ!!」

……恥ずかしいな。

顔が痛い。

でも……

「……じ、じゃあ……あ……んき……」

「阪急？ 阪急ブレーブスとはこれまた懐かしい名を。エエですな知将上田に率いられた三年連続日本一、山田が投げ福本が走る、西宮の人工芝に映える赤黒白の勇者

カラー」

「やつ！」

「……や、ヤンキー……ス……で、す……」

「おおお！ これは失敬、ニューヨーク・ヤンキースですか！

おお、おお、それはいいです！ なんちゅーても地球最強のチームですからね！！

あのピンストライプ、カッコイイですもんねえ……

よしわかりました!! まるっとコピ―つてわけにはもちろんいきませんが、できただけそれっぽく仕上げます！

あと背番号は？」

「いえもう、なんでも……」

「高校エースの1番？ それともプロのエース18番？」

「……でき、れば……14……とか」

「栄治さんですか」

ニヤリ問う彼に、照れて、俯く。

同姓の偉大な、伝説の投手。日本のプロ野球は、「栄治が投げ将が打つ」ことで始まったとさえ言われる。日本プロ野球史上初の永久欠番である。

「おおしましよ、おおしましよ。うんうん、お似合いだと思えますよ〜〜」

「いや、いや」

「……ほんでもう一つのもっと簡単なお願いっていうのがですね」

「あ、はい」

緩む顔を、パチパチ叩いて締めた。

「……説得、なんですけどウチの大将の」

「説得……」

「いやたいしたことないんですよ、たいしたことは。いやもう、確実にOKに決まってるんですけど、念の・ため、です。なんちゅーもアイツ、ああ、大将つてのは上町コーチのことなんスけどね、ご存知でしょ上町大地」

「あ、はい、昨日」

「男前でしょあれ。あれがね、まー責任感強いのはエエことなんですけど強すぎる。

『僕がみんなを国立の決勝戦へ』なんて見果てぬ夢を夢想しちゃってね、別のスポーツやるとかいいますとこれ、万万が一もしかしてひよつとするとほんのわずか

な可能性として、『膝とか怪我したらどうするの』とかこう心配し出すかもしれないこれ」

「あつ、そんな、迷惑かけるなら!!」

「いやいやいやいやいやいや、いやーいやいやいやいやいや、違いますまず聞いてくださいあのね、これは、みんな、チーム全員昨日一緒に練習してくださいましたあの面々、あれみんなやりたいと。澤村さんと野球やりたいと、これホントにこう言うてるんです」

「え……」

「いやこれはホンマです信じてください、この空堀三十六今日この口で訊きこの耳で確かめました、みんなの意思はそうなんです。たまには違うのやると刺激になる、リフレッシュされる、普段してない動きするとサッカーにも好影響だ、これはもうやるしかない、いや、やらねば次の試合は戦えないと、ここまで」

「は、はあ……」

「しかしご存知の通りウチのヴァルハラ的女戦士達はですね、みんなほぼまとめてコーチに惚れておりやがりましたからにこれ、その！まつとうな意見、ワタクシの本当のキモチ、これを言い出せない！惚れた男の前では従順な女の子を装いたいですなあ……可愛いもんです、おなごつて生き物は」

「は、はあ」

「で!!」

そこで澤村先輩です、みんなもこう言ってるので、やらせてもらえませんか、とこう、ガツンと一発」

「あ……けど、私、口とか、あの……うまく、なくて」

「そこで！ つけます助っ人を、もちろん貴女の親友、梅田ももを!!」

「ああ……ええ、まあ、それ、なら」

言ってみるだけなら、言えるけど……説得、という自信が……

「ふっふっふ、説得には自信が無い、というお顔ですな……」

もちろん溢れる熱意一つで立ち向かえ、などと古臭い精神論を振り回すつもりは毛頭ござらん！ そこは作戦を考えております!!」

「さく……せん。」

「名付けて!!」

……ごによごによごによ

「……ハ？」

「あつ、御安心を、御安心を。澤村先輩は歯医者さん」

「いや、それでどう安心していいか、わからない」

「あー、大丈夫です大丈夫です、そのへんはもー、ももちろんに全部おまかせで。昨日センターバック組まはったそうですけど、そんな感じで指示に従ってください」

「は、はあ………?」

「いやもう、つまり説得というか落とすのはピーチ・ボンバーなんです。澤村先輩はただもう突っ立って男前がガツクリ陥落するところを楽しんでくれました」

「はあ………」

「それで、大丈夫………ですか?」

「男はサービスに弱いんです」

「………」

サービス?

「……まあしかし、ここまでお膳立てしてもらって、嫌だとかなんだとかは、言え
まい。」

「………わ、かりました。」

とにかく、やっつて、みます」

「さすがです！」

さすがが未来のヤンキースの大エース!!」

「……」

カーツと顔が熱くなる。

我ながらホント単純だと思う。

今時小学生でもこんな簡単なお世辞では乗ってこないだろうに。

「……では、また、後ほど!!」

「えっ!? きよ、今日、ですか!？」

「当たり前です!!」

『善は急げ、悪はもつと急げ』

です!!」

じゃこれは悪なのか。

栄、空堀君のスキップ気味の後ろ姿を見送って、頭がぐるぐるする。
なんだかほんの数日で、自分の周りが急にぐるぐる動き出した。

ボールを取った。

もう縫い目もボロボロ、磨いても取れない汚れのこびりついた、いつもの相棒。

……大きくワインドアップから……

びゅーーーーーーーーーんっ……

ぱーーーーーーーーーん……

うん、今のは、いい球。

……野球が、できる。

久しぶりに、思いつきり。

いいじゃない、それで。

そのためなら……歯医者さんだつて……

……大きく振りかぶつて……

……ぶつ。

歯科医の白衣を着て新装・ヤンキースタジアムに立つ自分が浮かんだ。ダメだ。いろんなものが、ごつちやになりすぎてる。

……心を落ち着かせようと、ボールに呟いた。

ピンストライプ、14番、エース、ワールドシリーズ、都市対抗大会、歯科医……ヤンキース、伝説の選手、ストレート、カーブ、三振、はいお口を開けて……

なかなか、精神は、集中、してくれなかった。

■ 7 真夜中デンタル・クリニック

——放課後の練習が終わると、もう陽はとつぷり暮れている。大地は部室で、デ
ータや映像と格闘している。選手のフォーム、癖、チームとしての動きの良否、癖、
次の対戦相手……の、絵が撮れるほど恵まれたチームではないので、ざっくり方向
の似てるプロあるいは代表チームの映像を探し出して、我らが「ミラクルズ」なら
ばこのチームをどう倒すのかのシミュレーション……

時間なんか、いくらあつても足りない。

選手時代は監督なんて、気楽な商売だと思っていた。一〇mと走らずに口だけ動
かしてればいいなんて。

とんでもない。自分が関与できないからこそ、関与できるほんのわずかなポイン
トに、エッセンスを全て注ぎこまねばならない。スタメン、システム、ペース配分、
狙いの明確化、選手交代しかもたつた三名。やればやるほど、不安になる。

むしろ、こんな仕事を商売にする方がおかしい、とすら最近は思う。

勝ってほんの束の間、ホツとする。負ければ終わらぬ後悔が待っている。どう考
えても、割に合わないではないか。

「……ま、でも」

勝って選手達が喜びを爆発させている様を見るのは、それから、応援してくれてる客席の人々の笑顔を見るのは、たまらなく……なんだろう、たまらなく、胸の底が膨らむ感じ。うれしさと、感動と、えーつと……とにかく、他では、味わえない、浮き上がるような感じ。

これは自分が選手の時も、味わったことはなかった。

パスを出したFWがゴールを決めるのともまた違う、全能感とでも言うか、この状況を、つまり「この世界」を作り出したのは僕だ、というような、それはつまり、

「……僕は神だ！」

と、呟いて、大地慌てて周りを見回す。誰もいない。よかった。こんな独り言文脈無しに聞かれてもしようものなら、救急車呼ばれる。

いつもならこの横で妻の

今なんて言つた僕!?

ちよつともー、変に客観化する癖は直さない!!

……いや、客観化してたら余計マズイだろそれは!!

それが「指揮官」という人種に非常に有効な能力だと、さすがの上町大地でもまだ気づいてはいない。なんと言つても……まだ高校生である。

フー。

いや、とにかくそのつまり、美緒が居なくて、よかつた。

……いかん。あいつの罠にハマりつつある。

現実がそのように整えられていくと、つまり四六時中隣に居ると、まるでそこにちやんとした根拠や理由があつて、そこに居るかのように錯覚させられてしまう。そう例えば夫婦である恋人同士であるというような。

怖い。キャプテンはホント怖い。

いつもならほぼ帰る時間まで付き合う美緒は、珍しくナナが呼びに来て晩ご飯に行つた。まあ、この時間なら帰つてくることもないだろう。

……と、思えば思ったで、ふと、寂しくなる。

が、家に帰っても、独り。同じだ。

なるほど、横で何も言わずに編み物をしたり料理の本をめくったりしてくれてるだけでも、とつても心が落ち着……

いやあ！ もお!!

大地、頭をブンブン振った。今日は集中力が無い。

強いて理由を探すなら、昨日異分子が紛れ込んだことだろう。しかも自分も久しぶりに実践に出たことで、身体が、少し、燃えた。おかげでパーツといろんなアイデアが発火しすぎて、逆に頭が混乱している。

いやでも澤村さん明日からでもウチ来てくれたらありがたいなあ……あのパワーあの破壊力、僕が押し倒されるぐらいなんだもの、足元のテク無いつて言っても、そんなものはね、どうにでもなる。あーあ、来てくれないかなあ……

しょーもないことは思うものではない。

がばちよ

と部室のドアが開き、

「……あ、美緒、おかえ……

!？」

「はぁ~~~~い、おまていどうさまぁ~~~~ヴあけいしょん!

イツツ・真夜中!!」

「……で、でんたる」

「クリニ~~~~イツク!!

のお時間でえす♪」

「へ、へいつ!？」

珍しく声が裏返る。

このチームを見るようになってから大抵の珍奇な出来事には免疫がついたが、夜更けの部室に歯科医と歯科衛生士に殴り込みを掛けられては、反応のしようがない。しかも、

「はじめまして♪

担当させていただきます衛生士の、もも☆でえくくす♪」
「あ、あの……さ、澤村、です、……だ。よろしく」

コスプレだ。

澤村先輩は歯科医っぽい動きやすそうな半袖緑色の術着、ラテックスの手袋、大柄なので妙に似合う。それはいい。

問題はももの方で、基本的に勘違いしている。ピンクのナース服っぽいところまでは許すとしてスカート、タイトスカート、ぱつぱつぱつぱつだし、胸、いや胸、その、ボタン、ちぎれそうで、そのボタンのところでなんとか耐えてあとがびよんと伸びてる服なんて、マンガでしか見たこと無いです。これ絶対本物の服じゃない。ハンズとかで売ってるパーティーグッズだ。いや本物を着ろと言いたいわけはないが。

「ちよつ、な、なんです!? なんのイベントです!?」

「もちろくくくん、いつも頑張る大ちゃんに、スペツ・シャル・大・サーーーー
ビスですう♪」

「ハあ!？」

「……歯が、大切、です、……だ」

「いや洒落じゃないです」

「今日はあ、お歯菌の汚れがバッチリ取れるパーフェクト・ブラッシングをお、行わせてもらいまあす♪」

「いや、あの、」

「歯は、大切、です、……だ。ピツ、ピツチャーも、みんな、ボロボロに、なる」

「ダメじゃないですか!」

「だ、だからそう、ならないよう……に」

「僕虫歯ゼロです! 歯周病も今んとこ無し!!」

「ううん、だめ。大地君、大ちゃんはね、虫歯リスクが高すぎるの!」

「ど、どうしてです!？」

「甘い言葉ばかり囁いてるから。」

ホー……ホー……ホッホッホッホッホッホ!」

これ僕笑えばいいんですか。

「いやつ、すみませんやつぱり遠慮します! 歯は、歯は自分で磨けますから!」

「……たまには、専門家、が、磨くと、いい」

「先輩専門家じゃないでしょう!？」

「うん。いや。ちがう」

「どつちです!？」

「はあい、大ちゃん、今日は怖くないでちゅからね。ドリルとか無いでちゅからね。いい子だから、ちよつとじいじいとして、ね?」

「いやつ、まつ、待つてくださいってば!

なんの悪巧みです!？ ドッキリですか!？ カラ!？ カラちゃん居るの!？ そ

こに!？」

『……さすが大地だぜ』

いや、大地じゃなくてもわかります。

「ドッキリなんかじゃないよう。

今日はね、実はね、お・ね・が・い・があつて来たのお」

もも、身体をくねらせS字にし揉み手でなまめかしい視線を大地に投げる。甘つたるい声は普段から甘い物だけ食べてるからか胸焼けしそうに甘い。ぷぷっぴどう。

「は、はい!?」

「でもねでもね、お願いするだけじゃあ、厚かましいからあ、サービスもう、するのう」

「いやっ!? じゃ、じゃあそのお願い言ってみてください! サービスはまた後で!」

「ダメだよ。お願い聞いてダメだつて言われたら、サービスできなくなるじゃないかい」

「はい!? いやそれ、順番が、つていうか、因縁つけてるのと同じじゃないですか!」

「あ、ひどくい大ちゃん私達をヤクザさんみたいにい〜」

「いや、そうは言つてませんけど!」

「も〜く〜く〜く〜く〜、ワガママだぞお! 大ちゃん!!」

「いやこれ僕ワガママですか!」

「そお!!」

お医者さんの言うことは、素直に聞くもの!!
そうしないとナース……
怒っっちゃい・ナー……ス!!」

腰に手を当て胸を張った瞬間、
ぶちぶちぶち。
弾け飛ぶ三つのボタン。

「うわあああああ!!」
「あ~~~~~ん☆」

さすがに上町大地は愛と正義の人である。その刹那ガッチリ眼前で腕二本クロスして絶対に見ないそして見られないことを相手にアピール。

「あつ、だいじょうぶだよ大ちゃん、ブラちゃんと着けてるから」

「いやはあ!？」

「それにい、私はあ、後ろから支えるだけだからあ」

「はいい!？」

くるり。

椅子のキャスターが回され、

……ぼみよん。

なつ、なんだ!？」

頭が、頭全体がなにかやわらかいものに包ま……

「ひゃー……ひゃー……ひゃー……!!」

「しっ。大ちゃん、し・ず・か・に。近所迷惑だよ?」

「ひやつ、ひやつ」

「……失礼、します」

「えっ、えっ」

腕をガッシと掴まれて目の前から剥がされると、そこに澤村さんがアップで。不

必要に真剣な表情だ。右手に持つは……歯ブラシ。ごくフツの。

「いやつ、いやつ！」

「こらあだいちちゃん、暴れるなあ。」

ええく、いや、サワちゃん先生、脚締めてくくく」

「えつ、えつ……こう、か？」

ぎゅうううううう……

澤村先輩がその筋肉の発達した両太股で大地の両脚を締め上げる。

「いででいでいでいでいで」

「ああん、やりすぎい。サワちゃん、恋人を抱き寄せるようにく。」

こおんな、ふうにい」

もにゅくくくくくん……

あた、頭が、もにゅんとしたもので、もにゅんとしたものでくくくくくくく！

「こつ、こここここ、こつ、かな」

「そそ。」

「はいだいちゃん、お口、おーぷん」

「ちよつ、だから、ちよつ、あの」

「せんせいのこときいて？　ね？」

「……」

あのね。なんか視界がね、狭いんです。目の周りの皮膚も圧迫されてて。その狭い視界にっこり微笑む天地逆のナースも。

……これ逆らったら、殺される。

死因は窒息。

……あが。

「……で、では」

「も・も」

「はっ。」

あ、ああ、唾液ね。垂れ流していいよう、だいちゃくくくん」

「はっ、ははは、ははは」

必死で首を横に振ろうとするが、あまりに何かに埋もれててビクリとも動かない。呑むか。

いやさすがに辛いなあそれは。

「ひっひゅんはけ、ひっひゅんはけはなひへふらはい」

「だめだよ、そんなの。だいちゃんまた怖がつて、病院から逃げ出しちゃうでしょう？」

どんなストーリーが捏造されているのですか。

「……ハッ！ わかったそうだ、アレだ！

サワちゃん、じゃない、澤村先生アレですよ、じゅるー・じゅるじゅるじゅるー

っ！っ！って唾液吸ってくれる機械!!」

「……ああ。あるね」

「ね！ アレで吸いましょう〜！」

「しかしそんなのここには……掃除機？」

「それも無いねえ……」

「ハッ！ それは!!」

「ん？」

「サワちゃんそこ！ 机の上の紙パック!!」

「……おお。」

「つてまさかも!?」

「これで……」

「これで吸うしか無いようだよ!!」

紙パック？ 机の上？

……まさかひよつとしてあるいはまた方が一。

さつき、美緒と一緒に、紙パックのオレンジジュースを飲み、そこには伸縮自在の「ストロー」なる文明の利器が……

「ふがー！ー！ー！！ ふが、ふが、ふがー！ー！ー！ー！ー！！」

「こら、だいちゃん、あばれない・の！」

これどつちがだいちゃんのもの？ あどつちでもいつかー、吸つちやうんだもんね
ー！！

「ふぐぐ、ふぐぐぐぐぐぐぐ、ふぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」

「はいサワちゃん」

「わ、私もッ!?」

「こんな経験二度と出来ないよ。上町大地と間接キスなんて」

「間接キスかこれ!?」

「んー……遠隔キス？」

そんなことはどおでもよくて。いいよ、サワちゃんがトライしないなら私が一人でワールドシリーズを勝ち抜くよ。こんなこともできない人に、ヤンキースタジアムのマウンドはまかせられないね」

「ヤンキー……」

「……や、る」

ちよつ、ちよつと。さわむら、せんぱい！

「その意気だよ!!」

「ふもー……ー……!!! ふもおおおおおおおおお!!」

「じゃあそつちの持つて。

行くよ。

はいお口開けてくださいあい、吸いますよ……

「ふみよ……!!」

「ええいこんなワガママなお子ちゃまには……

ムリ・ヤリ・行きます!

先生! この閉じた唇に、ねじ・込む・よ……!!」

「押忍!!」

「ふみよ、ふみよ、ふみよみよみよみよみよ……

ッ……」

「ん……」

「……二人きりて久しぶりちゃう？」

「そだね。誰かいるよね。たいていみんな」

「チームが出来た頃を思い出すわ……へへ、懐かしい」

「そおだねえ。……思えば遠くへきたもんだ」

「まったく」

ラーメン『山嵐』はミラクルズの定宿の一つ。ファミレスタイプの明るい店内、抜群に美味いがあつさりヘルシーな自慢の麺、そしてリーズナブル・プライスとプライスレスなヒゲ店長の笑顔。

ナナの超叉焼麺と美緒の湯麺が順調に消えていく。味にうるさい美緒もこの湯麺にはフルマークをつける。

「……どうしよどうしよ、もしまかり間違つて優勝なんかしてもたら!!」

「ふふふ。いいねえ……一生の想い出に、なるね」

「そやんなあ! なんちゅーても日本一やで!!」

一生に一回でも、そんな経験できたら、嬉しいやろうなあ……」

「あら。ナナならこれから先いくらでも経験しそうじゃない」

「いやあ、わからんで。勝負の世界はホンマ運もモノ言いますから。超スターでも、優勝に縁の無い人はいくらでも居ます。

レドンドってアルゼンチンの名手がおってんだけど、この人ワールドカップにはとんと縁の無い人やったね」

「ふう〜ん」

「逆に優勝運みたいなのを持つてる人も居るねえ。元オリックス・田口壮さんなんぞ、ワールドシリーズ三回出て二回勝ってんねんで！」

「へえ〜、すごいねえ！」

「そんなん出るだけでもほとんどの選手は出られへん試合に、なんべんも出てしかも勝つ、なんてなあ、ねえ。それもう運ですよ、運」

「……ふふ、ナナならもつと、『ウチの力で〜!』とか言うのかと思った」

「いやまあ、そらウチの力でなんとかしたいけど、なんともできんもんもある、つちゅーこつたな」

「そうだね。」

「……カラちゃんと、なにかあつたの？」

「ん？　なんで？」

「いや、今日こうやってごはん食べに行こう、とか誘うから……」

「うん？ あ、今日はウチの人にそう言われたんで、あそうかたまにはエエかな、思て」

「そうなんだ」

「うん。いっつもコーチのお守りキャプテンに任せて申し訳無い、たまには慰労したりと」

「いえいえ、そんな。」

ほんと、空堀君は優しいね」

「うん。いやもう、ウチの人は優しーしてくれるよう。ウチにはもつたないぐらい」

「そうなんだ。いいねえ、ナナのところは二人ともおたがいに盛り上げ上手で」

「いやいや、いやいや」

照れて手を振った。

そりゃ、外から見てれば、この二人はちよつぴりおかしい。カラちゃんはナナをクレオパトラかなにかと勘違いしてるし、ナナはカラちゃんがいつも白馬に乗って提灯ブルマと白タイツ履いた王子様だと思ってる。

まあでも、両方勘違いしてれば、全然それでいい。

正直、羨ましい。

私は、全然、届いて、ないもの。

「……いや、まあ、みーちゃん」

「ん？」

「伝わってる。それは絶対。」

まあ、ウチが言うとは他人事みたいに聞こえるかもしれないけど、諦めたらあかん
で」

「……」

スープを見つめる二人。

「ウチの知ってるその人は、人の気持ちが変わらん人ではない」

「……」

まあ、どっちにしても、今はどうにもならないのは、私だつて覚悟済み。

「……吸い寄せるんだよ。女の子を」

「まあー！ それは、なあー!!」

「見たでしょ昨日の澤村先輩も。」

あんな一瞬でもうイカレコレですよこれ。

そのうち愛ちゃんの美貌にあーちゃんの怖さにナナの生活力になるーのセンスにも
もちんの優しさを兼ね備えた女の子が……」

「そんなウルトラシリーズの最終回に出てくる怪獣みたいな人はおらんから、心配
すんな。ていうか生活力て。もうちよつとエエトコ誉めてよ」

「生活力以上の女の魅力がありますか」

「それは男の人には伝わりにくい」

「そうなたたら私なんてただの一介の料理研究家だよ」

「そうなたたらそうなたたで『そこがええ』とかそうなんねんて！」

「そうかなー」

「なんや珍しく弱気な。弱気なキャプテンなんてなんや明日は傘が降るんか」

「私はとつても臆病ですよ。だからデイフェンシブハーフが向いてたんじゃない」

「いやいや、いやいや」

臆病、というのとはちよつと違う。べらぼうに慎重なのはそうだが、どちらかというと、リアクシヨニストというか、相手の出方に合わせるのが非常に上手で、だから、自分から仕掛けて行かない。行かなくていい。それはつまりだから、相手が動かないと、動けない。

『……そこちよつと変わると、この人は劇的に変わる気がすんねんけど』

ナナはそう思った。

試合でも、ウチでもゾクツとするプレーをすることがある。でもそれは本当に追い詰められないと出てこない。それがもし、自由自在に己の意思で出てくるようになれば……

でも、それが個性で、そうだからこそ今がある、とも言える。

ガスガス個性を押しつけてくるキャプテンか。

それはそれで、存在感がありすぎて周りが萎縮してまうな。今でもたいがい強すぎるのに。

それも見てみたい気もするし、今のまま伸びればいい気もする。

そう考えるとウチは幸せやった。ウチを全面的に認めてくれるあんなエエ人と知り逢えて。

『……まあ、こればかりは、運、です』

幸運に恵まれた者がまだそれに恵まれぬ者に「運です」というのは、嫌味に過ぎる。そして、残酷すぎる。

ナナは話を変えた。

「……そういうや野球、やっぱウチらの出番無いのかなあ、残念やなあ、せつかくやんのに」

「ん？ 企画からして3年中心なのはいいとして、えーっと……」

美緒も顔を明るくして、指を折る。澤村さんに、五人の3年生に、

「三人補充が要るから」

「センス的に言うとか千里と……」

「るーはあんま野球向きじゃないよね」

「やるならピッチとかやね。ほなパワーで蘭ちゃんか、スピードで可憐」

「あとはやつぱりナナじゃない？ 器用さから言つて」

「ウチやつたらねえ、明日葉とか入れてみたいね」

「ほくくおう。それまたどして？」

「いや、野球チームつて不思議なもんでね、九人おると一人絶対『変なん』混ぜていた方がええねんで」

「意外性の女つてヤツだね」

「うん。何かその一人がなにをするっていうわけやないんやけど、チーム力が全体としてアップする」

「ウチのチームで言うとか、ありすちゃんかな」

「ああ、そやねえ。大将があれにこだわるの、わかるよ」

「かなり無理してそこに拘ってるからね」

「うん。マトモに考えたらウチ左でマキやんあたりが右のフラットかボックスの4MFのがよっぽどええもん。それかどうしてもダイヤモンドや言うならトップ下ウ

チでアンカーにハナかユミ姉置いた形かな」

「でも。それより、たぶん、今の形の方が、強いんだよ」

「せやねん。」

『強い』ねん。たぶん。なんかわからんねんけどな」

「なんだろ……」

やっぱり、『意外性』かもしれないね。そのナナが言ったのだとどっちにしても、この選手はこう動く、っていうのがバレバレだもんね」

「せやな。あーがおると、アイツがおるおかげで、ウチらも時折大混乱に陥るんやけど、ウチらが混乱してるってことは……」

「相手も、混乱してる」

「サツカーに限らずスポーツはおたがい化かし合いやからな。やる事が予測できてまうことほどマズイことはない」

「うん。」

……ふふ。おかしなもんだよね。普段周りを大混乱させるはつぱちゃんやピッチでは超堅実なのに」

「せやー。あれ不思議やなあ。好不調の波も無いしなあ。わからんもんですよ、なんでも。やってみんと」

「そおだよお。」

野球でも、優勝しちゃったりして」

「あはははははは、無い無い。クイーンズカップの方は方に一つの可能性もなくはないけど、野球は無いわ」

「どして？」

「強い想い持つてるのが、一人やから」

「……ま、そういうことだね」

「……お二人さん、なんかデザート用意しよつか？」

「「あつ」」

大将が笑いかける。この人も熱烈ミラクルサポーターで、勝利の翌日は餃子が百円。

「杏仁豆腐！」

「ウチは湯麺！」

「「えー」」

大将と、主将が、顔をしかめる。

「湯麺見てたらウマそやなくって!」

「それ毎回言ってるじゃない、最初から頼めば」

「いやそやけど腹空かしてメニュー見たら、やつぱり超又焼が目飛び込んでくるねんで向こうから!!」

「よしわかったナナちゃん、今度両方を兼ね備えたメニューを考え出すぜ」

「ホンマに!? 又焼と野菜がこんななつてこんなな山にこんなマウンテンに」

「あー。そういう有名店あるね」

「あんな小汚ねー店にや負けねー!」

バツ。

大将のハートに火が点いた。

「ちゃんと偵察はしてるんだ」

「け、研究と言つて欲しいネ」

「大将もつと頑固者っぽくムスツと構えててーな、ラーメン屋っぽくないで」
「俺ああいうの苦手なんだ、料理の道は謙虚でないとイケねえぜ。なあ、美緒っ」

「そおですとも。」

でも、そういえばどしてラーメン屋さんって揃いも揃って男臭いんでしょうね」

「あつ。その理由知ってるウチ」

「「どして」」

「メン類やから」

……ぼん。

「……私杏仁豆腐で。この人には座布団」

「湯麺」

「ナナちゃんやればできるねえ」

「いつも全力投球のつもりなんスけどねえ」

ふと、杏仁豆腐で思った。

「……大将、杏仁お持ち帰りにして二つにしてください」

「お。りようかい」

「あ、帰ったんもん？」

「うん。お先、してもいい？」

「もちろん！ ……あんま無理しいなや」

「伝えます」

「あんたがや」

「ふふふ。……ナナもね。ここ」

ぽによ。ぽによ。

「ええやろうちのおなか。名作アニメになりそうやろ。うるさいわ」

「炭水化物摂りすぎ」

「これ今日一杯だけ！ これ最後！ これ最後！」

「……それウチ来て毎回言ってるぜ」

「ホンマに最後にして欲しい？」

「やれるもんならやつてみる」

「ウキー！」

「ハッハッハ。……はい美緒ちゃんこれ」

「ありがとうございます」

——杏仁豆腐を手に、学校に向かう。

今日もまた、食べさせようとして嫌がったり、しばらく放置するとDVDに没頭して食べさせられるようになったり、それに気づいて照れて器をむしり取ったり、でも実はそれは私の器で間接……そんなシーケンスが、始まるのだ!!

『……あつ。一つの器でも、よかつたねー』

それなら強制的に食べさせられるいや食べさせなければ天国のお義母さんに叱られる。

いえ待って、そう、レンゲを一つ、隠せばいいんじゃない？

『……うん。』

やっぱり、私は、しあわせだよ』

スキップしそうになる瞬間がある毎日なんて、それ以上を求めるのは、欲が深すぎる。

「♪らん らんらら らんらんらん」

ハミングしながら向かう先に、修羅場が待っているとは、美緒はまだ知らない。修羅場も、もつと修羅場がやってくることを、まだ知らない。

「……ああ、なんかエライコトに、ああ、なんかエライコトに、ああ、なんか、ああ、ああ、ああ……俺の責任か？ 俺の責任やな？ ああ、どうしたら、エライコトに、どうしたら」

「？」

「……カラちゃん？」

「エライコトにーーーーーッ!?」

釣り上げられた深海魚のように口から心臓を飛び出させながら、ジャンプ一番扉を隠す空堀三十六。暗闇に忽然と現れたキャプテンの視界から。

「ど、どしたの!？」

「ひ、ひや! はの、はのれすね、はの」

「なに、どしたの、そんなうろたえてる空堀君初めて見る」

「ひ、ひやその、えー、その、あの、その」

ふもーーーーーっ……

ふもーーーーーっ……

「……ん? 部屋からなにやら呻き声が」

「いやっ!? その、そんなことはないですっ!! きっと、きつとサッカーの! 中

東の!! ほえー ほわー て変な鳴り物!!」

「ああ、大地君のビデオかな。」

あ、そうそう、杏仁豆腐いただいてきたの。二人で食べましょ？」

「いやっ!? あなのっ、あの、あの……」

そ、そそそそそーだキャプテン、それ、それ二人で食べましょ！ 食堂行って

!!

「はい？ え、だって大地君が」

「いや、あのね、だい、大ちゃんえーつとそう！ トイレ！ トイレだから！」

「お手洗いだったら、待てばいいじゃない」

「大！ 超大で！ 三時間ぐらい掛かるって言ってた!!」

「脱皮じゃあるまいし」

「あごめ、違、先帰るって言ってた!!」

……ピン。

大地君が、私に声一つ掛けずに帰ることなど、ありえぬ。

パチパチパチ……

ピースが、ハマった。

「……空堀、君」

「はいイ!?」

「そこ、どいて」

「いやっ!? いや、ここは、ここはどけませんっ!!」

「どして」

「チームの勝利のために!! あるいはまた親友の名誉と健康のために!!」

「……」

「……あ。ナナちゃん、シャワー上がりバスタオル一枚だと風邪引くよ?」

「えっ」

どん・

がばちよ。

【本日のレシピ・おさらい】

・ヘッド・イン・バスツ 1個

・桃色ナース服（胸をはだけたもの） 1枚

・ストロー 2本

・愛 お好みで

……その夜。

学園近辺の住民は、奇怪な雄叫びを聞いたと言う。
もしやそれは、不吉をもたらす伝説の怪鳥、鶴の声か。

「ハイシャーーーーー……」

……ピーポー　ピーポー　ピーポー　ピーポー……

■ 8 背番号、愛犬の思い出、そして軟禁玉すだれ

——翌日放課後、グラウンド。新生ベースボール・チーム「ミラクルズ」を前に、空堀ヘッドコーチ。

「……えー、そんなようなことで、野球大会、出ます!!」

「「ウイーーーーー!!」」

「それでは澤村主将から、気合いのご挨拶を一言」

「は……いや、主将は、長居さんが」

「そいえばキャプテンは？」

「あとコーチ」

「えとですね、お二人は部室にて野球について一夜漬け猛勉強中でございます」

「あ、空堀ヘッド、でしたら私も」

「イヤッ! はい、大丈夫です、大丈夫!」

「でも」

「むしろ古都マネージャーにはこちらにて特訓のお手伝いをお願いしたい!」

「あ、それもそうですね、はい！」

「あんた何汗びつしより掻いてんのん」

「いや、いやちよつと、昨日あんま寝てなくて」

「カラちゃんはねえ、昨日、コーチの説得に、大活躍してくれたんだよ。ね、サワちゃん？」

「ヘッ!? あ、えー……そ、そう」

「イヤッ?! いや、き、昨日のことは、もうよろしやん……」

ももちはヤケクソに嬉しそうだし、澤村さんは顔真っ赤だし、空堀君は視点が定まっていなし、なんだあれ。

「楽しかった〜〜!」

「……怖かった……」

「……こわい、なんて、もんじゃ……」

地球が割れるかと思いましたが

「あつ。部屋のガラス、二三枚割れてるかもしれないね」

「ボクもう怖いもんなんかない」

オバケ幽霊妖怪悪魔、そんなもんよりな!!

人間の方が、よつぽど怖いんじゃない?!!

「あ、あんたどしたん!？」

「ハッ。」

いやいやいや、ななななんでもないです。

わたくしが! 緊急ヘッドコーチやらせていただきます空堀三十六です!!

「それさつき聞いたて」

「コホン。えとなんの話だつけ。あそうそう主将。えーこれは野球ですから、やつぱりね、一番うまい人がやるべきで。うん」

「あでも、キャプテンをキャプテンと呼ばずに澤村さんをキャプテンと呼ぶとキャプテンはなんて呼べばいいんですか？」

「鬼」

「おに!？」

「いやつ! いやいや、えー……め、女神、と、か」

「口歪んでんで」

「……ふふつ。」

いえ、やつぱりこのチームのキャプテンは長居さんだから。

私は、サワとでも栄とでも呼んで、ください」

「まーサワちゃんがそれでいいなら、それでいいけどー」
「そうですね。」

では、サワさん、一言、お願いします!」
「はい。では」

栄が一步前に出る。

向き直る。

みんなが私を、見つめている。

……チーム、か。

懐かしいな。

「……皆さん、こんなことに巻き込みまして、すみません。

……えと。

……えと」

「意気込みを」。『絶対優勝だ!』とか」

……

……け、怪我無く、無理せず、野球を……楽しんで、ください！」

「ハイッ!!」

「……えー……」

以上です。

よろしくお願ひします!!」

「よろしくお願ひします!!」

「パチパチパチパチ。はい、では、ポイントポイントで澤村さんに教えを乞いながら、キャッチボールから参りましょう！」

「ウイ~~~~~!!」

——栄は驚いた。

それぞれ得手勝手超自己流だが、教えることなんかなにもないほど、上手い。サードの赤毛の子が腰も落とさずシングルハンドでボールを搔つ攫うと、時計回りに回転して左腕で一塁へ矢の送球。セオリーからはぶつぱずれだが、まるでダンスのようにお洒落だ。髪をくくつた例の3番は異常なパワー、金属バットをおもちやのプラバットのようにはびゅんびゅん振り回しフェンス越えを連発する。近隣からの苦情が怖い。続いて超美形の11番が右ボックスで構えを取ると、ああ、あれはまさし

くA・ロッド。ちよつと口を尖らせ眉をひそめるあたり、そつくりだ。

『……これは……ひよつとすると……』

ひとつぐらい、勝てる、かも』

人間というものは、一つの夢が叶うと、次の夢を追いたくなる生き物だ。夢は食べ物。

食べないと生きていけないが、食べると無くなってしまう。

しかもあれはオープン大会だから、初戦ならそのへんのお気楽草野球チームと当たる可能性大だ。

いいなあ。

チームと勝利を分かち合う喜び。

もう三年から味わってない、あの喜び。

——休憩、水分補給。

「……いやあ、たまに違うのやるとめっちゃ楽しい！」

「だねー」

「これ毎日だとこれはこれで辛くなってくるんだよ」

「アハハ」

「あんた、あんたのことやからユニフォームとか作ってくれんねんやろ？ 縦縞？

縦縞!? 縦縞やんなー！ ぜっ・たい・縦縞!!」

「まそんな感じ」

「ひやつほ~~~~~~~~う!!」

ウチ背番号44!」

「あ、それならあたし51お願いします!!」

「あつ、イチローいーなー。カレ、ジャンケンしよ」

「だあめだよお！ 先取ったもん！ あんた00とかでいーじゃん」

「エー、それなんか期待の若手が着けるけど誰も大成しないって感じじゃーん」

「ピツタリじゃん」

「キミはそんな目でオレのことを……」

「ちーちゃん、じゃ二番バッターの代名詞0は？」

「んーなんか『ハリイ・ボッターとオクリバントの鬼』って感じだなー」

「いーじゃんか川相さん世界記録保持者なんだからー」

「チー助、『魂』とかどや」

「ナナさんが『笑』を着けてくれるなら考えます」

「と、このように希望聞いていると収拾つかないので、いつもの背番号です！

あ、胡桃さんだけ、14を澤村さんに譲ったってくださいね」

「ん。

……じゃ、代わりに」

「23で」

「ふふ。それで」

「マイケル・ジョーダンですか？」

「いや。もう亡くならはった親友の番号」

「ほくくくくう」

「ふふ」

ユウコが出して、私が決める。懐かしい。

ももが、ニコニコと笑う。

「い〜い話だねえ……」

じゃ私も、『ポン助』にしてもらおうかなあ……」

「いや、『ポン助』はちよつと……つて、親友？」

「うん。」

ウチに居た子犬。ボールを投げるとね、ぱーつと走って行って拾ってくる

の！」

「おお」

「私がサワちゃんをほおっておけないのもね、ちよつとポン助に似ているんだよ……」

…

「ポン助は、ドーベルマンかなんかでした？」

「ははっ」

千里のスレスレのスライダーに、笑う栄。

「ん〜、よく知らない。なんか毛むくじゃら系の」

「私、毛深くは、無いよ」

「眉毛。眉毛が濃い。この、この感じ」
「そうかなあ……」

お化粧などという行為には興味も経験も無い。まして毛抜きなどという物品には、触れたこともない。

「でも、ポン助はもう……ボールを追っては、くれないから……」

ももが遠くを見つめた。

「代わりにね、サワちゃんには、思いつきりボールを追って欲しいの!!」
「につ・こゝる。」

「これまたエエ話や……」

あんた！ 特例でもちんだけ『ポン助』にしたげ!!」

「いや、うーん、話はエエ話やというのは認めるんやけど、うーん」

「縦書きならたぶん入りますよ!」

「いやそういう問題では、なく」

「まとりあえず天国のポン助のためにも、ガンバロー!」

「おー!」

「あ、ポン助はまだ生きてるよ」

「はあ!」

「ボール追つてくれない、とか」

「太りすぎちやつてね〜。立つと、おなが、地面に、つくの。」

もう走れない」

「終了! 休憩終了!」

AチームBチーム分かれて紅白戦しま〜す!!」

「ウイ〜!!」

「あ、私着替えてきます!」

「いやこつとんええ。もちんずつとキャッチ! 永遠にキャッチ!!」

「えー。ホームラン打ちたいよう」

「ははっ。もも、じゃ、私も、投げる」

「あ、それもエエすね。対バッター勘を取り戻してもらうために」

——部室。DVD。野球&Baseball 古今東西名勝負傑作選。ぴったり並んで観る、監督&主将。

主将はずーつと紙パック野菜ジュースのストローを、くわえたまま。チャプターが終わったので、意を決してドリブル突破を試みる。

「……あの、美緒」

「ふぁに？」

「……お手洗い……とか、行ってもいいかな」

「ふぁめ。」

「……お勉強に集中してください」

「いや、も、もう集中力途切れそうなぐらい」

「じゃ、この場で。おシ瓶をご用意させていただきましたから」

「いやっ!? それは、それは無理だよ!」

「ああ。では、おまるを」

「大小じゃなくて! それは……それは恥ずかしい、つて!」

「私は恥ずかしくないよ? 全然」

「僕・が!」

「おっぱいに頭突つ込んでたくせに」
「ひがっ!？」

僕は被害者じゃない!? 被害者だよね!? ねえ!?
不可抗力だよ、ねえ!?

「では早速」

「無理無理無理無理無理無理!!」

「そこまで言うならしょうがない。向こう向いてます」

「音とか!」

「あー、音が恥ずかしいのね。」

「わかった。おむつ、用意します」

「オムツウ!？」

「もちろんアタツチは、このわたくしが」

「いやっ!？ ちよっ、ちよっと待って美緒、落ち着いて!？」

「なにが。」

「明鏡止水の心境ですよ?」

「そんな、オムツと違って、おかしいじゃない！」
「なにが。」

「ちゃんと大人用にします」

「いやいや、そういうことじゃなくて」

「デタツチもしますよ？」

「いやいや、いや、だって僕病人でも無いし君は看護師でもないし!!」
「あー。」

「ナース服ね？」

「イヤーーーーー!!!!」

「ごめんごめん。」

でもさすがにそれは用意してないね……

……この、胸のほだけたので、いい？」

「も、もう許してーーーーー!!!!!!……」

いや、僕は、被害者だろう！

どう考えても！

もお、ほんとに美緒つてばたまに無茶苦茶嫉妬深いんだから！

こんなことじゃ僕がホントに浮気した時どーするんだ。

……今なに言ってます僕？

「ホントに」とか「浮気」とか、なんですそれ？

ああ、いかん、なんか徹夜の疲れか、意識が朦朧と……

「……美緒、そのくわえストローくるくるするのだけ止めて。

トラウマが、トラウマが」

「うん。その記憶を、上書きしてるの」

「あ~~~~~~~~ん!!!」

キャプテンは、怒らせると、怖いんです。

怒らせなくても、怖いんですけどね？

■ 9 弱者の戦略

——そんなこんなで特訓の数日が流れ。

グラウンドでは紅白戦、部室では首脳陣の秘密会議。

「……監督、スタメン決まった？」

「うん、まあ。あ、ヘッドコーチ、そちらの案を見せてもらえますか」
「よし」

- 一番 ライト 此花可憐
- 二番 セカンド 吹田千里
- 三番 キャッチャー 梅田もも
- 四番 ピッチャー 澤村栄
- 五番 ファースト 守口忍
- 六番 ショート 八尾由美子
- 七番 センター 森之宮胡桃

八番 サード マキ・キシワダ
九番 レフト 西九条明日葉

「……うん、ほぼ同じ。3年中心だと、こんな感じだね」

「『ほぼ』とは？ 悩みどころある？」

「打順、もともと澤村さん逆、クーとマキ逆、あと明日葉の所のチョイス、あります、ナナ、蘭」

「こそ、そんな感じやね」

「メジャーじゃ今は三番が最強打者？」

「いや、やつぱり一番信用できるのを四番にしているとと思うよ。性能と信頼性は別やから」

「じゃあウチの場合は三番も四番サワでいいね。六く九でもう一つ一く四を作るというの？」

「それよく言うけどキチンと成り立つたところ見たこと無いなあ。九番に一番に繋がる快速タイプを置く置かないは別にして、上から信頼性順でええんちやうかなあ」

「打順が進むにつれて博打っぽくなるのいいね」

「九番はね、まあ、はつぽちゃんてええんちやう？ ナナ蘭は代打の切り札で置い

といった方が」

「ありすと流乃が代走の切り札かな。愛ちゃんは……」

「フッフッフ……今ちよいと面白い芸の仕込みを」

「ほう！」

「いや、得意の演技、つまり形態模写芸でなんか一発相手を騙されへんかなあ、と

……

「ケイタイモシヤ？」

「いやいやまあまあ、ちよつとしたお遊びですけどね？」

よし、ま、あとエレっぺはベンチでニコニコ拍手してたらええと」

「あの子はそれが才能だよね。」

これで大体OK、と」

二人とも、野球の鬼のことには触れない。

「……三十六から観て、気になる点、ある？」

……もし本気で勝ちに行く、としたら」

「エースのスタミナ」

「あやつぱりそうだよね。」

「……やはり個人練習じゃ限界がある、のか」

「いや、そやなくて対人戦はやつぱり頭使うから、脳が糖喰うんやつて。判断力と緻密さとかがどんどん落ちる。そこを誤魔化す練習は全然してへんから……」

「どのぐらい持つと思う？」

「球数にして一〇〇とかかなあ……六、七回……持つてば。」

あとな、どの球もめつちや素晴らしいねんけど、空振り取れる落ちる球系無いのと、あとムービング系の打たせて取る球無いから、球数どうしても増え気味になるわ」

「あのセンスならちよつと動かすボールなんかすぐ覚えられたと思うけど……もつたいたい」

「今さら言うてもしょうがない。」

あと、打たせて取るつてタイプでもないしな。燃えて向かっていく、典型的なパワー・ピッチャーですよ」

「まあね。じゃブルペンか……忍様、どう？」

「うん、エエ感じ。アンダースローやつてもらつてみたら意外にフィットしてさ、ああいう体術系がやつぱり得意なんやね」

「アンダースローか。いいね。目先変わるね」

「なによりちよつと握り教えてもらったら、シンカーが落ちた」

「あ、落ち球いいじゃない！」

「ただ。」

手の出方全然違うから、ちよつとセンスあるバッターやったら、バレバレ」

「うわあ」

「かといってそんなとこまで修正してる時間無いしな」

「だね。バレても落ちた方がいい。それで一回り、三回……」

「皮算用やねえ。で、そこで先ほどのプリンセス・ラヴが登場です」

「おつ。そうそう、やつぱり二回三回は？」

「いや。出オチみたい芸やから、一回、持てば。持たんな。一人」

「その三人でなんとか……か。フム」

「ま、投げるだけなら蘭ちゃんでも千里でもナナでもイケるけどね」

「まあね。守備は？」

「守備はこれでフィックスちゃうかな。このメンツやとこれで内外野とも完璧」

「そうだね、レフト蘭ちゃんにするかどうかって程度だね。でも明日葉落とすと」

「曲者が足りんと。うん、これでええんちゃうの？」

「よし。これで行こう！」

大地がにんまりと笑った。

「……いや、カラ居てくれて助かるよ。僕野球全然わかんないから」

「いやいや、さすが連戦連勝の名コーチ、もう俺なんかよりずっと詳しいって。俺言うても素人やからな」

「僕だつてそうだよ」

「といつてもメジャーじゃチーム作りGMなんかは選手経験無い人も増えてんねんけどな」

「あ、そうそう！」

「……貸してくれたこの本、面白かったよ」

「お。もう読んだん？ ……面白いでしょ、これ」

「うん、お話としては。」

「……ただ、賛同できないところも、多かつたけどね」

大地苦笑い。手には、マイケル・ルイスの名著『マネー・ボール』。抜群の球団

経営でオークランド・アスレチックスを強豪に仕立て上げた名GM、ビリー・ビーンを描いたものだ。

セイバーメトリクス。すなわち数理的な解析を通して野球を分析し、戦力強化・基本戦術・局面作戦・用兵に役立てる野球理論の実践者、草分けと言っていていい。

「……カラちゃんに教わっていろいろメジャー流のスタッツも研究してみたんだけど……どうも腑に落ちない」

「はは、やつぱサッカーの人間からすりやなんでもかんでも数値化してしまうのは馴染めない？」

「このさ、例えばOPSってあるじゃない、これ、何？」

長打率＋出塁率、『＋』ってなにさ。そんなの意味のある数字じゃないじゃない

「うん、だからそれは、相関関係というか、こういう数字と、得点能力が、相関強いですよ、という指標であって」

「だってそんなこと言えばさ、適当に足し算引き算掛け算して、都合いい数字でつち上げればいいだけじゃない。『得点能力』つたって、その選手が1点にどう絡んだか、どう責任があるのかどう貢献してるのか、なんて、結局数字弄りのさじ加減

一つでしょ？」

「うんうん。そやから山のように指標ができては改良され……」

「それも結局さ、今までの膨大なデータを参照してるだけだから、たとえばまったく新しいタイプの選手が出てきて、選手の実感としては『あいつがいるおかげですごく戦いやすい』とか思っけていても、数字に出てこない」

「それは、そうだねえ」

「『四球と単打は、投手に対する打者の勝利という意味では同じ』って、そりゃ理屈はそうかもしれないけど、現場のプレーヤーにとつてのインパクトは全然違
よ」

「いやいや、大地勘違いしたらあかんぞ、ビリー・ビーンの偉かったのは、さほど裕福でないアスレチックスを率いて、他所から放り出されたような安い選手を、しかし自分のチーム作りには合致した選手を掻き集めて、スターを揃えた金満球団に匹敵する結果を残した、つまり『弱者の戦略』が素晴らしかった、というわけで」

「うーん……『弱者の戦略』か……」

「そらあんだ、スーパースター集めたら誰が指揮しても勝てまんがな。じゃなくて、ポンコツとかでかいケガ明けとか、そういう選手が知恵と勇気と工夫で銀河系軍団を倒す。ここに魅力があるわけやね！」

「まあそれはね、わかる」

「数字はそのための道具や。一旦秘訣が知られてしまうとすぐ真似されてしまうから、どんどん新しい『考え方』を導入せなあかんし、なかなか大変やでー？」

「うーむ……」

でも最後は、数字じゃないところ、のような気が、するんだよなあ……」

「ハハハハハ、そりゃ元スタンプレーヤーからすればそうでしょうけど」

「ま、外から観てるのと、中から感じるのとは、別物だね」

「うん」

「野球も歴史があるだけあって、奥が深いなあ……」

「おつ。どうです今から野球の監督も」

「あはは、無理無理。」

「一球一球息詰めて観るの、心臓に悪すぎるよ」

「俺は九〇分一瞬も気を抜かずに見つめ続ける方が心臓に悪いと思うけどなあ……」

……

「そのへんは、向き不向き、だね。」

あとは……『運』とか『流れ』っていうの、絶対あるよ。

人間には、どうしようもないものが」

「……それをできるだけ排除して、『何をしようとしたか』を評価するのがアメリカ流さ」

「それも含めて、『何ができたか』を評価するのがヨーロッパ流かな。

どっちがいいとか悪いとかじゃない、ね」

「そのへんは、向き不向き、やなあ」

「はははっ」

「……こーち！ じゃない監督！ と空堀先輩ヘッドコーチ！

大変です!!」

「ん!?」

せつかく男の子らしい酔っぱらい会話の余韻に二人で浸ろうとしていたのに。古
都が飛び込んできた。手にFAXを持っている。

「……対戦相手が決まった、んですけど……」

「どれどれ……もーFAXなんか使うなよなー。全部Memoにしてくれっちゅー……
うわお」

「どうしたの？」

「……エライこつちや。こら……澤村先輩に、余計なお世話をしてしまったかも、しれん」

「ん？」

「……東京極土御門倶楽部（とうきょうごくどえもんくらぶ）？」

なに、これ？」

「ひがしきょうごくつちみかど・くらぶ。」

日本最古にして最強の女子野球クラブ」

「ほう」

「ちなみに前年のこの大会の優勝クラブです。日本中から優秀な選手が集まってる、スーパーエリート集団です」

「参ったな……高校最後の試合の思い出が、メツタ打たれコールド負け、つちゅーのは……二〇対〇とか、三〇対〇とか……嫌やなそれ……」

「……いや」

あ、火が点いた。

三十六、古都、「いつもの」大地を、そこに見た。

ここんところ馴染みのない野球絡みで、ただのおっとり美少年だったその顔が、キ

リリと引き締まる。いつもの、戦闘指揮官の表情に。

「……むしろいい試合、できるさ」

「また根拠のない楽観主義を」

「相手は油断しきつてる。一回戦でしょ？ たぶんスタメンもサブやサブサブの選手が並ぶはず。ピッチャーだってエースや二番手は出てこないさ。期待の若手とかね。」

ド頭で一発かまして、後はサワの炎のピッチングで五、六回押さえれば、勝つ負けるは別にして、試合には、なる」

「そおかなあ！ そんな簡単に行くかなあ!？」

「行くと信じて、やる、の。」

やってみるまでは、わからない、から」

「そやけど……そやけど、なあ……」

「まあまかせてよ。」

『弱者の戦略』なら、骨の髄まで染みこんでるから」

僕は。

世界ランキング一位のチームに、しかもホームに乗り込んで、しかも国際大会決勝で、世界三〇位四〇位のだ田舎チームで、挑んだことがある。もちろん、負けた。

世界中の人がTVで観てる前で、ボロボロに、負けた。

一発張り飛ばしてやる。

あの時足りなかったのは、その気持ちだ。

あの時は相手の名に本当にビビってて、相手の出方を見て、いいように殴られ続けた。

今度は、そうは、させない。

「……空堀ヘッドはとにかくサワを焚きつけて。君の方が野球知ってるから」

「ま、まあ、やってみます」

「監督は、チーム全体を焚きつけますか!」

「うん。」

……というよりも。

鬼軍曹を、焚きつけて、みます」

「鬼軍曹？」

「……なに、勝つたら、ちゅーとか？」

「いや。」

「……歯、磨かせてあげる、とか」

「うひへええ!!」

「むしろ……磨き愛!」

「うわあああああ!!」

「コ、コッワーツ!

「やつぱコイツら夫婦だぜ。ピンチをチャンスに変える方法論が同じ。
てかそんな恥ずいことよー考えるわ。」

「俺とナナなぞせいぜい一つのチュッパを二人でチャプスするぐらい。」

「歯？」

「いやこつとんこれはオトナの話」

「じゃ、僕はチーム見えます」

「はい! よろしく監督!!」

後ろ姿もさつきまでより随分颯爽と。

「……な、なんです？ 歯つて？」

「いや君もいつかわかる。いや、わからん方がええ」

「いや〜くん、気になりますう！」

「夫婦喧嘩は犬も食わん、つちゅーやろ。ドント・ドッグ・イート。OK？」

「パルドン？ それよりヘッド、汗びつしよりです」

「怖いんや。なにもかもが」

「はあ……」

あ、そうそう、ユニできました！

……こちらの台車に……」

「おつ、どれどれ……」

「ピンストライプ最高です！ この空堀先輩デザインのMとYを組み合わせさせたエンブレムも！ ヤンキースそつくり！」

「いいねえ！」

「これ、Mは『Miracles』でいいんですけど、Yはなんです？ 焼肉大好き腹一

杯？」

「アホいいなさんな。『YAKYUU』のYでんがな」

「ああ……納得。」

「ふふ、私の12番はどこかな」

「お、これが俺の36か。ウホ、いいかんじいいかんじ。」

「……ん？」

「ああ……せやった……これ、大地のやんな」

「ええ、6番です！」

ニューヨーク・ヤンキースの6番と言えば、三連覇を含むワールド・チャンピオン四度、地区優勝一二回の名将、ジョー・トリーではないか。

『……やっぱアイツ変な何か持ってたよなあ……』

指揮官運みたいなのを。

つまり、勝ち運、みたいなのを。

『人間には、どうしようもないもの』……か。
俺は個人的には好きやないけど……存在するのは、認めざるを、得まい。

勝つ負けるは別にして……
野球に、したいね。

——数時間後。グラウンド。

「……オラどおしたセカン立てー……ッ!!」

「……キ……キャプテン、げ、限界です!!」

「口きけるウチは限界じゃなあいッ! 立て! チー太ッ!!」

「……も、もうみんな……倒れて……」

「セカンは守備の要だぞ!? んな情けないこと言ってるからいつまでもレギュラーが獲れないんじゃないぞ!!」

「もおれぎゅらーいらぬです」

「うりやあ！ ミラクル・ノー………ツク！！」

カキーン！

……ぼぐつ。

「……うう………う………」

……ぎゅ

……ぼたり。

「……つたく、たかが三〇〇球ほどで音を上げるなんて足腰が基本からできてないよ………」

こんなんじや本番になんて到底間に合わない………」

古都お！！

「はいい!?」

「ホースで水撒いて叩き起こせえええ!!」

「は、はい、えと、でも、もう陽が落ち」

「ライト・アーーーーーッ！！」

カンッ！！ カンカンカンッ！！

ああ照明に、火が点る。

「うわあ、空堀ヘッドあなた鬼ですかーーーーっ！」

「俺かて死にたないもーーーーん！！」

「セイバーメトリクスとか全然関係ないじゃないですかこれ！ 高度成長期のスポ根物じゃないですか！」

「人間最後は根性が大事、つてことで」

「む、無責任ーーーー！」

「俺文化系やねん」

「そう人間最後に勝つのは想いの強い方！！」

はい朝ーーーーーッ！！

今日も一日！

楽しく・ベース・ボーーーーーッ！！

一六個ほどの死体から、返事はない。

もちろん澤村栄も、みなを庇つていの一番に立ち往生大往生そう、武蔵坊弁慶の
ように。

監督ですか？

もちろん焚きつけるだけ焚きつけといて、自分監督室で野球観戦ですよ。真新しいユニとスタジャンに身を包み、ヒマワリの種を噛みながら。なんでもね、カタチから入らないと。

「……しようがないねもうホントにまつたく甘えん坊ベツカムばかりなんだから
ウチのチームは……」

よし三〇秒休憩————！

しかるのちベース・ランニング三〇〇周————ッ！！」

死体達から、返事はない。

■ 10 バトルフィールド・オブ・ドリームス

「……プレイボーツ!!」

「うううううううううううううううううううううううう……」

「ナナうるさい」

「甲子園はサイレン無いと始まんやろ!」

「「あはははは……」」

——丸珠公園野球場、全日本都市対抗女子クラブチーム野球大会一回戦、ミラクルズ対東京極土御門倶楽部、おお、見よさすが名門、数百人単位の応援団と観衆が歓声を送る。対するこちらは野球なのに集まってくれた物好きサポーター有志連で……

「……♪あーりすのゴールが見たー……い……い……」

見たー……い……い……見たー……い……い……い……」

「ちよつ、テツちゃん止めて!! ゴールせえへんし!! ありす出てへんし!!」

「けど野球どうやって応援したもんか忘れちゃってさあ！」

「お前ホンマに援団の副団長かいなあ！ もおエエからメジャー流に静かに見守ってナイス・プレーで拍手、手抜きプレーでブーイング!!」

「OK!!」

……おつ、一番可憐ちゃんか！

みんないくぞ！ コンバット・マー……チ!!」

「人の話聞け……」

空堀ヘッドがいつもサポーターをまとめてくれている千林哲哉と漫才をする。サポーターいやファン達もゲラゲラ笑っている。気分はすっかり草野球。いや、草野球なんだけど。

しかし相手はマジもマジ、ピシッと着こなされたユニフォームは純白にアンダーシャツとソックスが赤。ヤンキース永遠のライバル、ボストン・レッドソックスに見えなくもない。いずれにせよ白地にピンストライプ、濃紺のシャツとソックスのミラクルズと好対照である。

——カーカーンッ!!

「おつつける」という今ひとつよくわからない日本語は、今まさにこの時に使うのだろう。右足を華麗に引いた芸術的とも言える右打ちで、ライト前ヒット。全く千里は小技だけできつと天下を取れる。

たつた2球で、無死一二塁。

ピッチャーは汗を拭った。顔立ちは幼い。背番号は54。大地の言ったように、期待の若手とか、そんな感じ。立ち上がりの強襲を受けて、目が少し泳いでいる。

三番も、のし、のし、と右打席。まだ乱れてもいない足元をならして、

ビシー————ッ!!

「————ッ!!」

ベンチもスタンドも沸いた。左腕、そしてバットをレフトスタンドへグイと伸ばしてホームラン予告。早い。早すぎる。まだプレイボール数分後。

馬鹿にされた、と思つたのだろう、相手投手が、こなくそ、という声が聞こえそ

うに力んで、ボールを投げた。

ぶおおおおおおおおん……

扇風機どころの話ではない。長嶋茂雄デビュー戦四打席四三振の如くヘルメットを吹き飛ばし、台風のような突風が吹き荒れる大空振り。だがそれは……

「……サーツ!!」

ショートの声に捕手がハッと我に返った時にはもう遅い。三盗、そして二盗、重盗。

「ガッツ!!」

可憐と千里が、それぞれの塁上で拳を握る。もも、鷹揚に左手を挙げて、援護をアピール。たまらず捕手、マウンドへ駆け寄る。

まさか相手の能力もわからないしこの状況で敬遠はない、が、大きい打ちそう

なので「ボールでもいいという気持ちで」。

これはよく言われるが、こんな気持ちでできる精密作業なんて、この世の中に一つだって無い。成功を本番を前提にしなければ、人間の身体に力など宿らない。

瞬く間にへろへろのどう見てもボール球が三つ溜まって、

「……ボール！ ボール・フォア!!」

もも、ベンチに拳を上げつつのつしのつしと一塁へ。無死満塁。絶対のピンチ。ここでこちらは、主砲・澤村栄。

『……よし』

バッティング・センターで長年愛用のマイ・バットを下から上まで見つめて、気合を入れた。最高のお膳立て。

上町監督、ウェイティングサークルから歩き出そうとする栄を呼び止める。

「……なんでしょう」

「ホームラン」

「……がんばります」

「がんばりますじゃない。打つんだ」

「……ハイッ！」

笑顔を噛み殺す。打てと言われて打てれば、こんなに簡単な話はない。だがそんなとぼけた言葉で、肩の力が、抜けた。

相手ピッチャーはもう心ここにあらず、相当なお年を召した相手監督は、彼女を鍛えてるつもりだろうか、微動だにしない。マウンドで、ひとりぼっち。

……可哀想だな。つい数日前までの私も、ああだったんだけど。

初球。もちろん、「置きに」きた。真ん中高めの、腕の振れてない、ストレート。

キーーーーーーー

わあああああつ!!

歓声がボールを運ぶ。ぐんぐん伸びて、伸びて、伸びて……

バンッ!

左中間一番深いところフェンス直撃、長打コース。俊足の可憐・千里はもちろんな
生還、問題は……

「うわあ、もちん遅いーっ!!」

「きやああ! 流乃さん回したーっ!!」

ドストドストドスト……という擬音と土埃の見えそうな、ももの突進。三塁を
蹴る。ボールはセンターからショートに中継に入つて……

ああダメだ、タイミング完全にアウト……

「だーーーーー！！」
「ヒッ!?」

どーーーーーん。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……

ラグビーとかアメフトとかそんな甘いもんじゃない。

お相撲。ツツパリ大相撲。

何回転させられたかわからないキャッチャーが、グランドの壁に背中を当てて、
ようやく止まった。

……ぼろり。

「……セーフ!!」

「ホーム!ホーム!バックホームツ!!」

「……ハッ。

んならーーーーーツ!!」

キャッチャーのバックアップに走ったピッチャーが、仲間の声に我に返って気絶して捕手の傍らのボールをすくい上げ、本塁目がけ目一杯送球。そこにはカバ―に駆けつけた一塁手と、

ズザアアアアアアツ!!

長駆ダイヤモンドを一周した、栄。

「……タッチ・アウト!!」

ああ~~~~~~~~つ……

失望の声は欲深き声、なんといつても3点先制。

……ベンチに帰ると、手荒い歓迎、歓迎、大歓迎。

「………すいません、監督」

「いや、ナイスラン！ あそこは狙うべきだ！」

「いえ。」

「……ホームラン、打てなくて」

「あははは、うん、そうだね、ホームランに、ならなかったね」

「……へへ」

サワが、照れ笑いを浮かべた。

「……おつと監督、敵さんピッチャー交代でつせ。マネージャー、21番」

「はい！ えーつと……21番……21番……」

わ。先発二番手のピッチャーです!!」

「げっ。もう本気かいな。素人相手に大人げない」

「去年の決勝戦でも投げて、四回をパーフェクト！」

「得意のボールは？」

監督が聞いた。古都は手元のパソコンを、叩く。

「……ナ、ナツクルボール!!」

「ナツクルウ!?」

それはさすがに、練習してない。

「数少ない本格派のナツクルボーラーで、ほぼ全球ナツクルナツクルまたナツクルだそうです!」

「むう」

「おう、キャッチも代えてくるぞ。27番。あれは?」

「えと、えと……主戦捕手です!! 打者としても五番を打つアベレージヒッタ

ー!」

「わお。

と、なると、ここからはそう簡単には点、獲れないね」

「そうですな」

「もう2、3点、欲しかったね」

「本気で勝つ気やったんかいな……」

「あたりまえだよ。なんでも、やってみなくちゃ、わからない」

——しかし、早くも本気にシフトした名門、もうバッテリーの緊張感が違う。迫力が違う。そう場慣れしきった落ち着きを見せられると、こちらが逆に浮き足立つ。

五番忍、武人の瞳で相手投手を睨めつける。

しかしその集中力をいなすかのように、ナツクル。柔能く剛を制す、投げた本人すらどこへ行くかわからぬ白球は、忍の鋭い視線と剣先を掻い潜る。

三振。

「……忍様！ ボール見てった方がいいですか!？」

「いや。二対一で入れてきてる。ボールと見てたら、やられるぞ」

「ユミねえーッ!! 当てててーッ!! なんとか前へ転がせーッ!!」

六番ユミ姉。秀才肌、読んで考えて狙って正確に丁寧に、しかしそのやり方も、これまたナツクルと相性が悪い。

ワンバウンドするような悪球を、空振り三振。
チェンジ。

「……難しい……」

「ユミ姉さんが頭抱えけるとこなんてなかなか見れないよ」
「気合か根性か努力か、どれかが通用して欲しいわ」

いつも通り泣き言をてんで泣いてない口調で言い放つて、守備職人はいつものサングラスを掛け、ショートのポジションへ走った。

——さあ一回裏。いよいよ澤村栄、オン・ステージ。

……ズバアアアアンツ!!

「うおーーーーーつ!!」

ど真ん中一球目から、敵陣に声が上がった。彼女らのレベルでも認めるに足る球、ということだ。

『……サワちゃん、飛ばしていこう!』
『……もちろん!!』

ズバン・ズバン、三球三振、
ズバン・ズバン・ズバン、三球三振、
ズバン・ズバン・チップファウル、ズバン、三振、
三者連続空振り三振。ほぼ全てが、渾身のストレート。

「ワーーーーーッ!!」

盛り上がる盛り上がる。

これ……勝てるぞ!!

「目処がつく」ということほど、元気の出ることはない。

守備位置を移動する暇もなくさつき行つてすぐ帰つてきたスタメンが、笑う。ベンチももうお祭り騒ぎ。

……除く首脳二人。小声。

「……どうする？ 抑えさせよか？」

「いや、細かいこと言わない方がいい。行けるところまで、これで」

「五……六……五やね」

「ん。考えとく。」

「……はは」

「……ん？ 何笑ってるの」

「野球の監督つていいね。相談できる時間あるもんね」

「ああ、まあ、そやね。目を離してええ時間あるからな」

「うん。日本人向きだよ。お相撲とか」

「つまり一対一の真剣勝負が好きなんやと思うけどね」

「武士道だね。」

あと役割分担がハッキリしてて、機会も均等だ」

「ああ、チャンスが平等、つていうのはアメリカ人が好きやねえ」

「それを活かすか殺すかは、自分次第」

「逆に厳しいとも言える」

「ん。言い訳は効かないね。他人にも、自分にも」

——だが相手はさすがに主力投手、本気になれば付け焼き刃の素人の手に負える相手ではない。唸りをあげる魔球・ナックル、次々にミラクルズ打撃陣を血祭りにあげていく。

しかし、栄も負けてはいない。

なんと言つても、楽しくて仕方がない。

野球。試合。チーム。バック。そして、打席、打線、作戦、指示、コーチ……監督。

なにもかもが、自分に無かったものだった。

私は一体今まで、なにをしてきたのだろうか？

少なくとも、「野球」では、なかった。

だから、「野球」ができるのが、楽しい。

渾身のストレートを、指よ手首よ肘よもげよと言わんばかりの変化球を、身体が

軋むようなチェンジアップを、投げ続けた。

だがその喜びとはしゃぎっぷりが、確実に彼女の体力を奪い……

——五回裏。ついに捕まる。

二巡目に入ると、相手も落ち着いてくる。コントロールはさほど精密ではないのがバレ、球種さえ読めば似たような軌道であることがバレた。おそらくものリドも素人くさいのだろう、ボールをよく見られるようになって……

「……ボール・フォア！」

思わず天を仰いだ。四番・五番がガマンにガマンを重ねて連続四球。無死一・二塁。初めての得点圏ランナー。六番打者、ジツと監督の指示に耳を傾けている。

『サワちゃん弱気になっちゃダメだよ。バッター集中で、得意の全力ストレートか

ら!!』

『………ん』

四球が込むと意識して腕が振れなくなるのが一番怖い。自信のある球で、押す！
六番がバットを短く持つて、いかにも当てに来ている。
そうは……

「……させるかー……ー……ーッ!!」

「あつ!!」

ひよろひよろひよろ……
スツポ抜けだ。握力がもう足りてない。

実はそれをこそ、言い含められていたのだろう。バッターはキツチリ、ポイントに呼び込んで、振り抜いた。

キー……ンッ……

センター前ヒット、二塁走者生還、3-1。なおもノーアウト三塁一塁。

このままじゃ、あと2点のリードなんて、あつという間に吐き出しちゃう。ここは、なんと少しでも、私が、がんばら、ないと……

「……こら、サワちゃん」

「あ」

マウンドに歩み寄ったもすが、サワの頭にミットを乗せた。

「……自分一人でなんとかしようと思っちゃダメでしょー？
野球は、九人で、ううん、全員でやるものなんだから！」

「あ……あ、ああ」

「バック信じて、どんどん投げろーーー!!」

「……バック……信じて……」

「……ん!!」

「よし!!」

「じゃ、元気の出るおまじないね？」

「は？」

……チュツ。

しかも、リップ・トウ・リップ。

わあああっ!?

「……なっ、なっ、なっ」

「じゃあと三つ！ ガンバローー！」

「いや、あの、あ……」

とつとと駆け戻っていった。

なにがなんだか、わからない。

ただ……肩の力は、ガツクリ抜けた。

抜けてみると、握力が、もう無いのが、わかる。

ああ、今のは、それか。

無いなら無いで、そのように投げるだけだ。

ももは、そのことを……

いやあ!? ももだからなあ!? そんなこと考えてないねえ!?

「……な、なに、あれ?」

「もちろん……見境が無さ過ぎるわ……」

「仲良きことはステキなことデス」

「それはそーなんだけど」

「あつ、でも!」

ありすが指差す。我らがエースは、さっきのすつぽ抜けとはうって変わってゆったりしたフォームから……

ひゅん……

手投げのような、緩いカーブを放った。もちろん、初めての球。

剛球ばかりに辟易していた相手が、手を出した。

カーーン……

打球音はいい響き。しかし今ひとつ力無く、

「……ハッ!!」

まるでバナナをもぐサルのようにジャンプ一閃、マキが頭上のボールをもぎ取った。サードライナー。三塁ランナー頭から帰塁。これで一死・一塁三塁。

『……なんだ、これで、いいのか』

なんて楽なものだろう。

人間は信じ合うようにできていて……そうやってまとまると、チームになると、力が何倍にもなる。

栄にも欲が出る。

一死で一塁にランナーなら、ダブルプレーが取れば、楽だ。

……そんなこと今の今まで、一瞬たりとて考えたこと、無かったのに。

ニヤリ。
唇の端つこが、勝手に歪んだ。相手は八番、打撃力はさほどでもないだろう。
ならば、これで。

豪快な直球と同じフォームで、打ち頃打たれ頃の球速の……シュート。

キンツ!!

引つかかった!!

あつ、でも球足が速い！ センター前抜かれるか！

そこがユミ姉である。投手の心境の変化、打者の打力を計算して守備位置調整済み、ギリギリ追いつきシングルハンドでボールを削り捕ると、

……ぽいっ。

グラブトス・トウ・セカンド千里。

千里、そのトスを右手素手で掴む。

まるで舞を舞うように右足つま先をセカンドベースに引っかけると、身体をヒネってネジってそのまま一塁へサイドハンド・クロスボウ・スロー。

忍、一塁手、その長身をいっぱいいっぱいに伸ばしてその矢を、捕る。

「……アウツ!!」

美麗極まる6―4―3ダブルプレー完成、スリーアウト・チェンジ。

ワーーーーーッ!!

ベンチとサポ……いやファンが沸き、ハイタッチを繰り返して選手達が帰ってくる。最後に、全員と手を合わせて、栄が微笑む。

「キャプテンどうスカ!! やりました!! やりましたよ!!」

「ンム。今のは、そこそこ、よし」

「キャプテ~~~~ン!!」

「よし、よし」

美緒の胸で泣く千里。いつの間にか師弟関係が。

「……サワ・ちゃ~~~~ん!!」

「うわあ! やめて! やめてもも! 私まだ投球あるから!」

「むちゅ~~~~ん……」

「ふぎゃ~~~~ん……」

「いや、サワは次ファーストへ。

忍、行くぞ」

「おつ。りようか~~~~いッ!!」

「か、監督、まだ行けます!」

「いや、握力戻そう。忍に時間稼いでもらう。

ほら、もう、全然」

「あっ」

くにくにくにくに……

サワちゃんの右手を両手でとつて、揉み揉みまくる大地。
茹で上がる、エース。

「……わ、わかりまし、た……」

「ん。また投げてもらうかもしれないから、覚悟はしてて」

「……は、い」

「……サワちゃん冷やすう？ 冷やすのあるよお？」

「……いや。感覚、無くしたくない」

「あゝ」

「……い、いや、投球の！ 投球の！」

「なにも言っていないよ」

「う、うん」

「ふふふふ……」

……栄、ベンチでずっと、手を閉じたり、開いたり。

——六回裏、守口忍登板。

敵が予測不能のナックルボールなら、こちらは変幻自在のアンダースロー。今ではめつきり見なくなつた「サブマリン」、まさに右手が地面を擦るがごとく下から……

湧き出する!!

パーン！ パーン！

そして追い込めば……伝家の宝刀、といつてもついこないだ手に入れたんだけど、沈む球その名もそのまま、シンカー。

スッ……

落ちる。バットは虚しく、そのはるか上空を切る。

「……ストラック・バッターアウト!!」

そのコールを三度聞いた。それすなわち、三者連続三振。盛り上がるベンチ、忍を迎えてはしゃぐ選手。

……でも、和製トリー、眉一つ動かさない。

「……相手の監督、まるで動じないね」

「あーもうすぐ見切っちゃったみたいねえ」

「立派な監督さんだ」

「もう四〇年からあのチーム率いてるらしいから」

「はあ……偉大な大先輩だね。かくなりたい」

「なれるさ。あんたなら」

「できるだけ持つてよく、忍様〜」

——七回、表、攻撃、三者凡退。

裏、守備、三者凡退。

——八回、表、攻撃、三者凡退。ナックル攻略の糸口掴めず。

裏、守備。少しだけ、景色が変わった。

「……下ッ!!」「したっ!!」

先頭打者三球目、追い込んでからのシンカーに、相手ベンチが口々に喚きを上

る。声を聴いて判断というわけにいかなくとも、投手には非常に鬱陶しい。忍、露骨に顔をしかめて、四球目。

『あー、だめー』

ベンチから声は飛ばない。ストレート。
キンッ！ 弾き返される。

「……あ、バレた」

「ダメかあ」

「ええい、力尽くでなんとかしてくれ忍様、この回だけでも!!」

大地のみならずベンチの願いはしかし虚しい。球種が二つなので、精神的に優位に立ってる時は「おらおらどつちかなどつちかな!？」と押せるが、弱気になりだすと、どつちを投げても読まれてる気になる。

「……下!! 下!!」

『……つさいなもおおお!!』
『しの〜! 落ち着いて〜〜〜!』

……フォアボール。無死一塁二塁。点差は2点、同点のランナー。
忍はスイッチを入れるのに儀式の要る人で、今回は雑念が多すぎる。ももだけでなく内野陣が、集まった。

「忍、また二つ取るから、打たせて取ろ」

「そつスよ! まかせてください!!」

「ソーサ、なにがなんでも捕ってヤルカラ!!」

「守口さん、バック、信じて」

「……つてことだよ、しの!」

「ごみんねえ、みんなあ」

「全部シンカーで行こう! 相手の意表をつく古武術シンカーで、きりきり舞いだよ!!」

「ツケー!!」

半ばヤケクソ気味に、肯いた。

うん、ゴロ、さえ、打たせれば……

——シュツ

カ・ツーーーーー……

「……あつ!?」

ゴロはゴロでも無人の二遊間をキレイに割り、センター前へ。二塁走者、三塁を蹴る。しかし。

「……ふんつ!!」

我々は忘れていた。センターにブザー・ピーターが居ることを。

胡桃、凄まじい勢いでそのボールを走りながら掠め取ると、流れる動作で右肩を思いつきり振るつた。

こんな小さなボールなら、三〇〇m先にだって、投げてみせる。

——ドン!

ドンッ!!

「……アウツ!!」

最初のドンはセンターからストライクの音、次のドンは不動山にランナーがぶち当たった音、そしてアウトコール。もも、それを聞くや否や、

ビュンッ!!

座ったまま三塁へ送球。

欲張った一塁走者が、マキのグラブを、ボール入りのそれを、三塁ベースに踏みつけた。

「……アウツ!!」

「ツシャー——ッ!!」

珍しく忍が奇声を上げた。これで二死走者一塁。かなり肩の荷が軽くなる。ようし、あと一人、あと一人もこの調子で……

勝負を急ぐ忍の心理を読むかのように、ゆったりした足取りで相手監督がベンチを出る。打者交代。鼻息荒くベンチを飛び出してきた大柄な選手、見るからに雰囲気がある。

「こつとん、あの代打は？ 31番」

「えと、えと31番は……主戦の三番打者！ 穴は大きいですがパワー・ヒッターです！」

「……どうする監督。秘密兵器もいけまつせ」

「んー……」

野球の監督大変だな！！

全部僕の責任じゃないこれ！！

ああ、ああ、絶対サツカーの方がいい。いい。

「……パワー・ヒッターなら忍のコントロールがものを言うだろう。とにかくこの場面、大きいのでさえ打たれなけれ」

「アーーーーーッ!!!」

打たれた。

初球本塁打。2ラン。

ホームランは野球の華。

何人もが何球も何十分も力と知恵と技術と神経を振り絞って稼いだ貴重な得点を、ただ一振りで稼ぎ出す。

同点。

「はあああああ……」

ため息のこちらと対称的に大はしやぎの相手ベンチ、ばこばこ嬉しそうに殴れる勇者、そしてマウンドで両手をついてる忍様。

「……カラ、愛投入。交代告げてくる」

「すまん、今の俺が遅かった」

「いや、僕だよ」

ベンチサイドから、愛が歩いた。大地、マウンドで忍の肩を叩く。

「……忍様、ごめんね、無理いつて」

「うあ〜ん、ご、ごめんなさい〜」

「いい、いい、しの悪くない」

「ン！ まだドーテンだし!!」

「そツスよ！ こつからツス！」

「ありがとう、守口さん」

「……さて」

「……」

のす、のすと身体を揺するようにユーモラスに歩いてマウンドに上がった愛は、いつになくえらいブツキラボーだ。

チラリ、相手ベンチを覗く。動きはない。一番打者の俊足に賭けたか。強打者が出てくれば、すぐサワにスイッチするつもりだった。内野守備なら悪くないはず、こちら賭けに出てみるか。

「……まかせます」

「……」

黙って肯いた。

「さあて、どんな仕込みがありますことやら……」

セットポジションからごくごく軽い投球練習を終えて、バッターがボックスに入る。プレイのコールが掛かる。

その瞬間、人々はそこに、英雄を見た。

天高く突き上げる両手、それをグイ、と背中側へ引くと同時に身体をねじ切れんばかりにひねり、おしりを背中を背番号——しかもそれは11——を見せて、その渾身の力全てを球威に換える。ああ、あれぞまさしく真新しき伝説。

「「トルネードッ!!」」

金田も稲尾も杉下も鈴木も山田も桑田も松坂も誰も誰一人としてやってない四年連続最多勝、打者絶対有利のクアーズ・フィールドでのノーヒットノーランもちろん空前おそらく絶後、社会現象になりあのバリー・ボンズが目を輝かせて対戦を語り銀メダルから二〇年後の北京五輪でさえアマ世界最強キューバ代表が「ジャパンにあの男は居るのか」と震え上がる伝説の英雄いやヒデオ、ザ・パイオニア・

野茂英雄！

……ぼす。

……に、してはゆるーいストレートが、もものミットに収まった。

本物としか思えない庄巻のトルネード投法に度肝を抜かれた打者が、眼をぱちくりさせている。

ああそうかなるほど、竜巻が舞えば誰だつてあの剛速球か滝のようなフォークを想像する、それをいなして初球はスローボール……

……ぼすん。

二球目も、スローボール。

……えつ、ちよつと待つて、これつてもしかして……

……くくつ……くくくくく……

……ほしゅん。

三球目は、もつとスロー。ホームベース手前五mぐらいからおじぎしておじぎしておじぎして、でも、

「……ス、ストライク・バッターアウトツ!!」

「えええー……!?」

審判をもの言いたげに見つめる納得できない打者、悲鳴をあげる相手ベンチ、ボールを高く放り投げて走り去るも笑い堪えるの必死、のす・のすとああまさに英雄・ノモのようにマウンドをゆるゆる降りる愛、ベンチで三十六が、

「ツシャアア!! こんなん成功すんの一生に一回やで!! うへへへへ!!」

「野球のカミさん怒つて来えへんやろな!」

「アホウ、なーんにもズルはしてへんで!」

「……プリンセス、ナイス・アクトレス・イヤツホウ!!」

「好物は寿司です」

「いや、もういいです、もう」

「♪ヒ・デ〜〜〜オ!」

「いや自分では歌わないたぶん」

「……さあて、仕切り直しだ!!」

「円陣組むか!!」

「「ハイッ!!」」

監督の号令で、全員でベンチ前円陣。

回は最終回、九回表、最後の攻撃である。3―3の同点。

「……ド素人がここまで来たんだ。もう勝てとかそんなつままないことは言わん。総力戦で行くぞ!

全員、持てる力を全部ぶつけろ！ それぞれが自分の思う最高のプレーを!!」

「ハイッ!!」

「ではここまで僕らを引っ張ってくれた、エース・澤村さんから一言」

「えっ……あ、はい」

組む肩、組む腕、髪が触れあい同じ空気を吸って、同じフィールドに、立つ。

「……みなさんと、野球、できて、楽しかった、です」

それ以上、なにも、ない。

「……あと一回。」

スウ……

胸一杯に、この、素晴らしい空気を。

「………しまつて・いこー………!!!」

「ヘーローイッ!!」

——ああ、しかしマウンドに登るのは、あのナックルボーラーではない。
背番号42。長身で、ヴェテランの風格漂う。

ドスーーンッ!!

ドスーーンッ!!

もう音からして違う。あれはなんだ、鉛の球でも投げているのか。

「……わわ、わ、り、りりりフェースです!!」

「なんと念には念を入れてか! 球種は!？」

「ス、ストリートと、カットボール!」

「カッターかあ……微妙に芯外されてゴロにされてもう難儀な球やのう……」

「……むしろ掠りもしないナックルの方が手に負えなかった。交代は吉と考えよう。
ナナッ!!」

「おつしやああああ! 出番キタア! まかせとけええええ!!」

九番明日葉に代えて、代打ナナ。背番号7。
また、大地がベンチを出て、耳打ちをする。

「……あああああ、おかあちゃんエエトコ見せてやああああ……」

「……カラちゃんには悪いけど。」

蘭！ 美緒！ 次！ その次！」

「「ハイッ!!」」

「……ナナには、いかにもな仕事を、してもらいます」

「えっ？」

右打席に立つナナ、ランディの背番号を欲しがった割には、フォームは……強
いて言えば落合三冠王のような、神主打法。ボールをしっかりと見て、腰で……
振る！

パーンッ！

だが芯を外される。キャッチャー後方へのフライ。次はサードファウルフライ・スタンドイン。追い込まれて、最後は、

ゴヒッ……

ボテボテ……ボテボテボテ……

ピッチャーゴロ。余裕綽々のクローザーが拾って送って、1アウト。だが帰ってくるナナのその顔は、極めてクール。

「……どうだった？」

「ほんの心持ちだけ下を擦る感じかな……実は落ちてると思わせてあんまり落ちてないって気がした。だからポップフライになつてまう……ちなみに全部カッターっぽい」

「だそうだ。コーチ、蘭へ」

「なるほど威力偵察か。了解！」

「まプレーの正確性で定評のあるウチやないとできんことやな！

……思いぎり打だぜろ……」

「またこんど、またこんど」

「今度なんでない〜〜〜〜！！」

ナナの犠牲の上に、代打パワフルヒッター、天満蘭。

パアッコオオオオオオオオン……

「うおおお!? ……おおおおおおお……」

蘭のパワーは半端ではない。超特大ファウルがおかしな弧を描いて消えていくのを見て、リリーフ・エースが顔色を変えた。つまり多少、芯を外されても、大きいのを飛ばされる可能性がある。

ナナ相手のような力尽くでど真ん中へ放り込むピッチングから、コーナーを広く使って、散らす。

一球目真ん中高めを、大ファウル。二球目外低め一杯、ボール。三球目内角高め引き起こし球、見逃してボール。四球目外真ん中ギリギリ一杯、コースはストライクを振り抜いて、またもキャッチャー後方へのファウルフライ。カウント2―2。

「……カラなら？」

「外角低め一杯へ最高のカッターや！」

「ん。蘭もそう読んでると思う」

五球目。

……キーーーーー……

「「よおし!!」」

センター方向へ高く高く上がった大飛球、センターバック、センターバック、センターバック、センターバック……

高く、上がりすぎた。

特大のセンターフライ、2ダウン。ランナー、無し。

「「……キャプテン!!」」

「……」

美緒にいつもの軽口はなく、監督も声も掛けない。だってそこには信頼があるから。

一球目、先ほどと同じ外角低め、見逃してストライク。二球目、内角高め見逃して、ボール。三球目外角高め見逃して、ボール。四球目真ん中高め、見逃してストライク。2―2からの決め球はやはり……

外角低めいっぱい、蘭を討ち取った必殺のカットボール。
……を、

キンッ!

カットする。打席で初めて振ったバットで。

「あつ! そつか!」

三十六初めてそこで監督の意図を読む。

なんや「四球と単打が同じなんてありえない」とか言うといてからに……
つたく、貪欲なヤツめ。なんでもかんでも吸収しよる。

必殺のボールを挫かれて鼻白んだのだろうか、次の一球は明らかに無駄球。内角高め誰が見てもボール球。もちろん我らが主将は手を出さない。フルカウント。

カットボールは手を出させてゴロを打たせてナンボの球だ。手を出さないならストリート……しかしここで、前の打者のパワーと前の前の打者のコンパクトなスイングが目焼き付いている。

カットボールをカットしてくるということは、待つてるのは真っ直ぐではないのか？

キャッチャーのサインに首を振った。

安心の持ち球を、初めて内角低め、投げつける。

「……ポーツ！ ボール・フォア！」

「SHIT-」

「やったあああ!!」

美緒の勝ち。「くさいところだとカットされる」という意識が強すぎて、外しすぎた。

「ナイスガッツ！ さつすがキャプテン！

流乃、ランナー！」

「Si-」

代走に流乃が出る。ベンチはもう、それだけでワクワクする。向こうさん、この化け物の足を知らないだろうから……

リリーフ・エースは額を拭いた。振り返って冷静になれば、なにもこんな心理戦に巻き込まれる必然性は無かった。なんだかあの打者と相對してると、どんどん考え込まさせられて……もういい。自慢のボールをど真ん中に三つ、揃えればいいだけだ。

三番、バッター、梅田もも。

——ビシッ!!

「ワーーーーーッ!!」

手を叩く、手を叩く、またやった、またやった。

ホームラン予告、十八番お家芸の、ホームラン予告。

ムッ、とした。それで気を引いて盗塁援護か。それ初回にやったじゃない。見てないけども？

ナメ、ちゃあ、いけないわ……よッ!!

ど真ん中へ思い切りクイックでストレートを投げ込んだ。

ぶおおおおおおおん!!

よし、大空振り!!

……キャッチした女房役が、首を振った。

えっ?

振り返ると、二塁に、赤毛の子が、立っている。メットを脱いで、前髪を整えている。

相手ベンチが、手を叩いて、囃し立てている。

えっ? えっ?

だって、雰囲気も、リードも、なにも……

しかも不可解。相手ベンチから監督が出て、交代を告げる。

代打……じゃない、代走だ。

代走の代走!?

しかも、しかもあの足の持ち主を!?

意味がわからない。

ワケがわからない。

ハイタッチで迎えられる背番号5を、しばらく見送った。

んで、出てくる今度の子はまたちやくて華奢で……あの5番はいかにもスプリンターみたいな細くて長い脚を持つてたけど、この子は……

ぶかぶかの両耳メットを被つて、ととととと二塁に向かった。背番号は、21。

「♪あーりすのゴールが見たーいーいーいーいーいー」

見たーいーいーいーいーいー 見たーいーいーいーいーいー」

客席から変な歌が流れた。代走にヒッティングマーチ？ 聞いたこともない。

一体なんだ!? このチーム!?

頭ぐるぐるさせながらバッターに向き直る。

——ビシッ!!

だから、ホームラン予告は、もおええつちゅーん・じゃーいーいーいーいーいーッ!!

力の限り投げつける、バットをへし折る電動ノコギリと異名を取る自慢のカッタ

、
それを。

「ああっ!?!」

球場誰一人、予想だにしていなかった。

だって、あの人、遅、さつき、一回、えっ、二死で、チャンスの、はあ!?

セーフティバント。

一塁側よく転がつてる、キャッチじゃ無理、ファースト通常守備、慌ててマウンドを駆け下りる、素手で掴む、送球しよ……ファンブル。

「あ—————!!!」

ずど—————!!!

一塁へ、もちんの、ダイナマイト・ヘッドスライディングが、決まった。地震が起きる。スタジアムが揺れる。その揺れにピッチャー、投げることもできない。いやもちろんそれは誇張だけど。

呆然と一塁ベース上に昼飯後の乳牛のごとく横たわる巨大物体を見つめていると、
「ホーム!! バックホーム!!」

ハッ。

走者二塁からの奇襲スクイズか!

振り向きざま本塁目がけて力の限り投げつけた。もう何年も何千回も繰り返してきた。内野ならどこに居たって、正確にキャッチャーミット目がけて投げられる。

視野の右端に、三塁を蹴ったさっきの小さな走者が、入った。ヘルメットが飛んだ。キャッチャーが構えたミットに、自分の放った白球が、吸い込まれた。

間に合った。余裕だ。

キャッチャーが腰を落とす、左脚を折り右脚を踏ん張り、本塁前の城壁と化す。
あの華奢な身体では、無様に弾き返されるのがオチ……

……とん!

「「!!!」」

見たことのないものを、見た。

宙を舞う、野球選手。

彼女はキャッチャーブロック手前で軽やかにまるでバンビのように両脚を揃えて跳ねると、

くるり

と身を丸めて捕手の上空を通り過ぎ、

……たん。

天使のように降り立った。もちろん真っ白な、ホームベースの上に。
ただ、今見たものが信じられなくて、何度も、何度も、目をぱちぱち、した。

「……セツ、セセセセセ、セエエエエフ!!」

4-3。ミラクルズ勝ち越し。

デヤアーーーーー……

絶叫とも悲鳴ともつかないものの中へ、21番が飛び跳ねながら帰っていく。4番も巨体を一塁ベース上でぶるんぶるん揺らしている。

そんな……そんなアホな。

これは夢だ。そう悪夢に違いない。

ああ……監督。いや、こっちこないで!

「……交代だ」

「……ず、ずいませ……」

「いや。」

……ワシが悪かった。ちいーと舐めすぎてたな。獅子は兎を狩るにも全力を……
なぞという言葉をまさか自分が使うとは、思わなんだわ

「ずいません……」

「気にするな。悪いのは人を、野球を、舐めてかかったワシだ」

「……ピッチ代えるんか!? うお、本気やな!」

「本気も本気、18番……エースです!! 日本代表のエース!! 前回のワールドカップで二勝した!」

「マジで!? 大ちゃん、いや、監督!」

「……サワ!!」

「!」

もう、作戦なんか何も無い。

大地は、おもいきりスイング、をした。

栄が、ニッコリ、笑った。

エースは、また一回り、迫力があつた。身体が大きく、見えた。マウンドに立つ

と、神様みたいだった。

栄は、ただ、眩しくて、嬉しかった。

ホームページでしか見たこと無かった、雑誌の小さな写真でしか見たこと無かった、憧れの大投手と、向かい合ってる。ただ、それだけで。

三球三振。

全てフルスイング。

悔しさも情けなさも無い。ただ、爽やかさだけが、血管の中を流れていった。

——九回裏、マウンドに立つ。

ナナちゃんがセカンドで、ありすちゃんがレフトで、蘭ちゃんがファーストで、愛ちゃんの代わりにエレちゃんがライトに入って、みんなが、守ってくれている。

二番、大きなカーブを狙い打たれて、無死一塁。

三番、スライダーを右に流されて、無死一・二塁。

四番、フルカウントから内角シュートわずかに外れて、無死満塁。

五番、に、代打。

「……………」

「……………背番号3。先日のワールドカップの日本代表の、四番打者です。昨季社会人リーグ通算打率・489、本塁打27」

息を潜めて見守るベンチに、古都の声だけが響いた。

ももがマウンドに登る。二人きりで、話をする。もうグラブで口元を隠す必要もない。

「……………サワちゃん」

「ん」

「一つだけ訊くよ。」

「……………勝ちたい？ それとも……………」

「野球がしたい？」

「もちろん」

足元をならしていた顔を上げると、ももは、いつも変わらぬ微笑みで、あたたかく見守ってくれていた。

「……野球が、したい」

「よし!! やろう!!」

それだけ言うと、一つおしりを叩かれて、降りていく。

おつきな背中。頼もしい女房役。マスクを被って、ミットを叩く。

さあこい、と。

静まりかえるスタジアムに、プレイのコール。

ピッチャー澤村、セットポジションから第一球、渾身のストレートを――

■ 11 夢はでつかくハてしなく

——さあ本日は待ちに待ちつた校内女子ソフトボール大会決勝戦。やはり逆山で勝ち上がったのは2年選抜、今や遅しと待ち構えるは3年選抜。

目眩がすると評判の超個性派「心は銀河系」（ハートギヤラクテイコ）軍団2年生に対し、3年生にはなんと頼もしい、頼もしすぎる助っ人が……

「……エーッ、澤村先輩ヤメテくださいよお！」

「はは、もう思う存分、ソフトもできるよ」

「いやああん!!」

2年ベンチに挨拶に来てくれたサワちゃん先輩。あの試合が終わってから、ずいぶん笑顔が穏やかだ。

特に最後に被弾した代打逆転満塁サヨナラホームランの話になると格別嬉しそう
で、

「めちやくちや、キレイ、だったね、あのホームラン」

と他人事のようにうつとりと目を細めた。

「ホームラン、打たれて嬉しいなんて……はじめて。
まだまだ私は、野球を、なんにも、知らない……」

「……そうそう、サワ先輩補強選手に選ばれたんですって!?」
「うん。まあ……」

「あの相手の監督さんがえらい惚れ込んでくれはったらしいてな、ウチが地区代表取つたら絶対に呼ぶから、つて。あの爺さん影響力あるらしいて、ほなウチもウチも言うてどこが勝つてもウチの地区の補強選手になるらしいで！」

「へえー！ 凄いですねえ！」

「いや、そんなことは……全然、私なんか」

「よかつたですね、たくさん野球できて！」

「う、うん」

「ほな夢はでつかく日本代表のエースやね！ 14番着けて、ワールドカップでまた優勝してくださいよ！ ええなあ野球は！ 男子も女子もじゅーぶん世界一狙えるもんなあ！」

「いや、夢は……」

「ん？ あ、そうそう、澤村先輩の夢はワールドシリーズ優勝じゃない！ ヤンキースに入団して！」

「いや……」

実は、大きな夢ができて。

なかなか、野球と両立が、大変そうなんだ」

「ほう!!」

澤村先輩は、顔を赤くして、でも嬉しそうだ。

「そんな、野球バ……いや、野球キチ……いや、野球オタクの澤村先輩が、野球ほつたらかすような夢って……」

「うん。たくさん勉強しないと、ダメなんだ」

「ワールドシリーズよりもでっかい夢って、なんですかのん!？」

「……」

サワちゃん先輩、もつと頬を赤らめて、三十六を見て、美緒を見て、そして、監督を、見た。

「……は、は、歯医者……さん」

「「はあつ!」」

「……せつ、正々堂々、戦おう!!」

失礼しまッス!!」

咆哮一声、ああマウンドへ駆けていく。

「えつ、はいしゃ? つて歯科医!? なんじゃそれいきなり」

「芸能人は、歯が命」

「あつスポーツの人食いしばってボロボロになるっていうからね」

「でも澤村先輩の歯トウモロコシみたいにキレイだよ?」

「カラ・ちゃん?」

「ぶるぶるがたがたぶるぶるがたがたがうおれちがうこれはちがうおれちがう」

「だ・い・ち・く・ん?」

「いやっ!? ぼぼぼぼぼ、僕はあれからなにも! なにもなにもなにも! ホント

に! ホントにホントにホントに!」

「あつ、ほらほら、始まるよ!!」

「……勝つたら!」

「ケーキ!」

「負けても!」

「ケーキ!」

「ベルトの穴はゆるめても!」

「ハートとヘッドは!!」

「しまつて・いこーいこーい!!」

「おーいこーいこーい!!」

キャッチャーももの音頭に、3年ナインが唱和する。

彼女はいつでも、守備の要。

一番堺愛、右ボックス。

あああは、ヤンクスの偉大なキャプテン、デレク・ジータ。

そしてマウンドには、我らがエース・澤村栄が仁王立ち。

こちらは他の誰でもない、サワちゃん先輩その人だ。

サムライとガンマンの睨み合いに、早くもボルテージ最高潮。

「……プレイボール!!」

審判の声が木霊する。

ダイヤモンドに、青空に、若き心の、中に。

♪私を野球へ連れてって

グラウンドへ連れてって

バットとグラブは持った？

陽が暮れたって構わない

さあ相手チームを叩きのめそう

勝てないなんて許せない

ワン・ツー・スリーストライクでアウト、

それがおなじみ、野球ってゲーム

ワン・ツー・スリーストライクでアウト、

野球って、とびつきり、たのしい、よ。

Never GiveUp, Go Ahead, and DO MIRACLES!
Episode4 「ボールゲームく連れっっっ」

【あとがき】

ありがとうございます。ながたかずひさです。
お楽しみいただけましたでしょうか。

僕らが子供の頃はみんなマイ・グラブ持っていて、上手い下手とか好き嫌いとか関係なく、みんなで野球（みたいなもの）をしてました。作中にも書きましたが「誰もに打席が回る」「そのポジションの責任はその人にある」という点が、あの頃の日本にフィットしてたんでしようねえ。

一度は野球の話を描いてみたいと思ってました。楽しかったです。でも九回のドラマ描くの大変ですねー。野球マンガが巻数多くなるのもよくわかります。

おっと、本編のお話も。

ここ二本ほどゲストキャラの方が目立ってますが、気にしない（笑）せっかくのももちんですからもう少しお色気方向でも……と思いましたが、あれが限界です。あの人はそういうことを意識してないところがまた魅力ですし。

澤村さんはどうでしょう、アホに巻き込まれるマジメなスポーツ少女、って感じが出てました？ またご感想いただけますと嬉しいです。

自分で描いといてあれですけど、キャプテンはいつも強いですね。

さて、いつものエンディング・ポエムの代わりに載せたお馴染みのこの歌の、原詞を貼っておきます。

亡くなった親友がヤンクスの大ファンで、新婚旅行で観る一試合のために、この歌暗唱していきました。今年はワールドチャンピオン獲れて（しかもヒデキMVPのおまけつきー）きつと喜んでると思います。

「Take Me Out to the Ball Game」

♪ Take me out to the ball game,

Take me out with the crowd.

Buy me some peanuts and Cracker Jack,

I don't care if I never get back.

Let me root, root, root for the home team,

If they don't win, it's a shame.

For it's one, two, three strikes, you're out,

At the old ball game.

webにも「ミラクルズ！」の詳しい設定資料などございます。
ぜひ一度、ご覧ください。

<http://raken.net/>

感想ご意見などございましたら、お気軽にお声おかけください。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

最後にもう一度。

お読み頂きまして、まことにありがとうございます！

二〇〇九年十二月 ながたかずひさ

